特 116
519
271
73
40

囲碁会

巻の五

特116
519

特116
519

圍碁打方十箇條

一、一ト處ばかり打たずして盤面四方に氣を配はれ

二、無意味の石を打つべからず必ず幾度も考へて打つべし

三、豫め彼れと我れと地積を計算して勝敗を察し夫々手段をめぐらすべし

四、敵の弱點を見出して之を攻むると同時に己れの弱點に備ふべし

五、强き敵地にある石は棄つる方得策なるべし

大正
1.10.29.
内交

六、諸方に關係深き我が石はみだりに棄つべからず

七、多數の敵子を得て大勝を貪るは無益なり要は危險なく安全の勝を得るにあり

八、置碁の黑は受身にて損なれども堅固に打つ方安心なり決して對等に鬪ふべからず

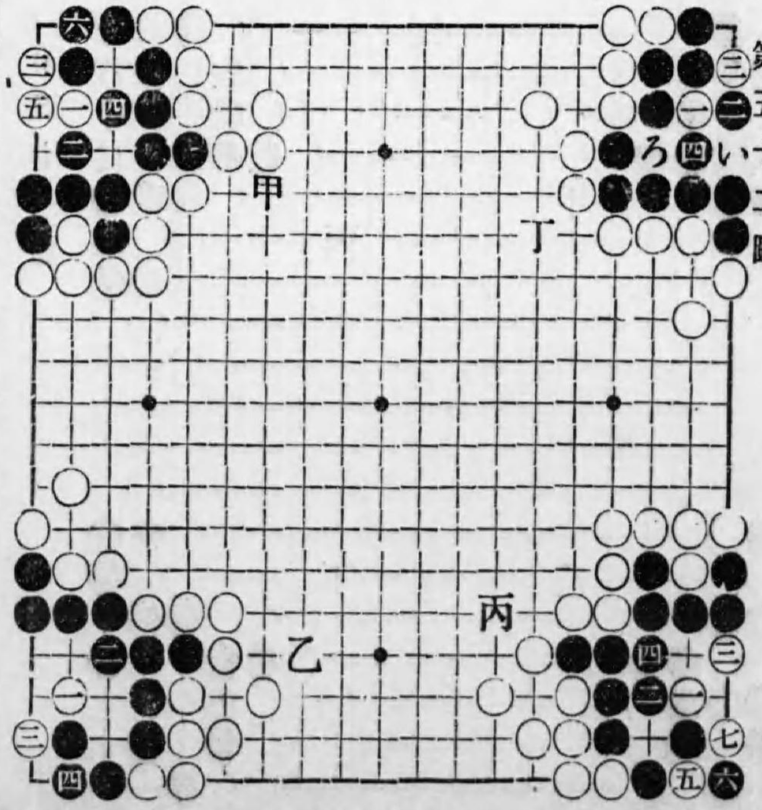
九、置碁に對しての白は多少の無理は仕方がなけれども餘りむきだしな無理を打つべからず

十、互先の碁は置碁と違ひ勝敗を爭ふに一歩も讓らざる手段をとるべし

以上

圍碁手ほどき

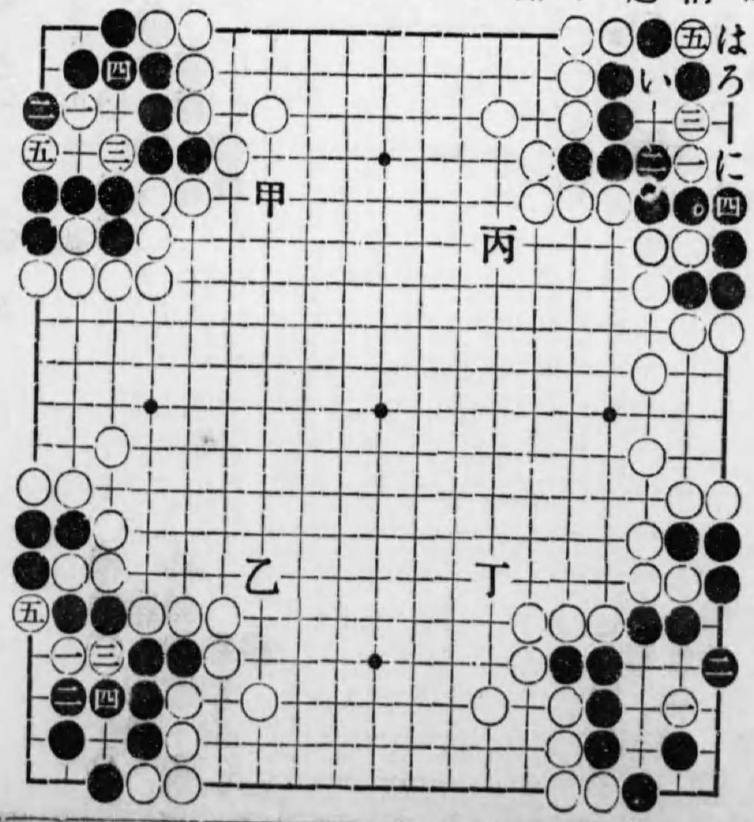
（第五十二圖說明）　前卷（第四十九圖乃至第五十一圖）に次ぎて初學者の迷ひ易く間違ひ勝なる手筋を解說すべし●甲隅是にて黑は大丈夫の積りの處白より一と打たれて一驚の體なり前體此黑はダメヅマリにて味大に惡しく初段に對し四五目の打人ならんには一見直ちに手入をなすべき形なれども初段に井目位の棋にては往々見誤りて手を抜くことあり注意すべきことなり白より一と打たれしとき黑は二と受くるの外なし以下圖の如く運びてセキとなり但し黑二は「い」に打ちてもセキなれども圖の如く打つ方好し●乙隅は甲隅の變化にして同じくセキなれども白より劫ダテに利用さるゝ手を存する



第五十二圖（第五）

だけ損なり●丙隅も甲隅の變化にして黒二の手惡しき爲め劫となれり此圖の如くなりては黒は先づ敗局となるべし●丁隅は白より此隅に劫ダテを爲すとき如何に打つべきかの問題なり是は一と打つべき處なり黒二のとき再び三と劫ダテに利くべきが故なり尤も「い」の點に一と打ちても二回利くべきも圖の如く高き方に打つを本手とす而して四又は「ろ」の點に一と打たんには一劫より利かざるを考へ見るべきなり

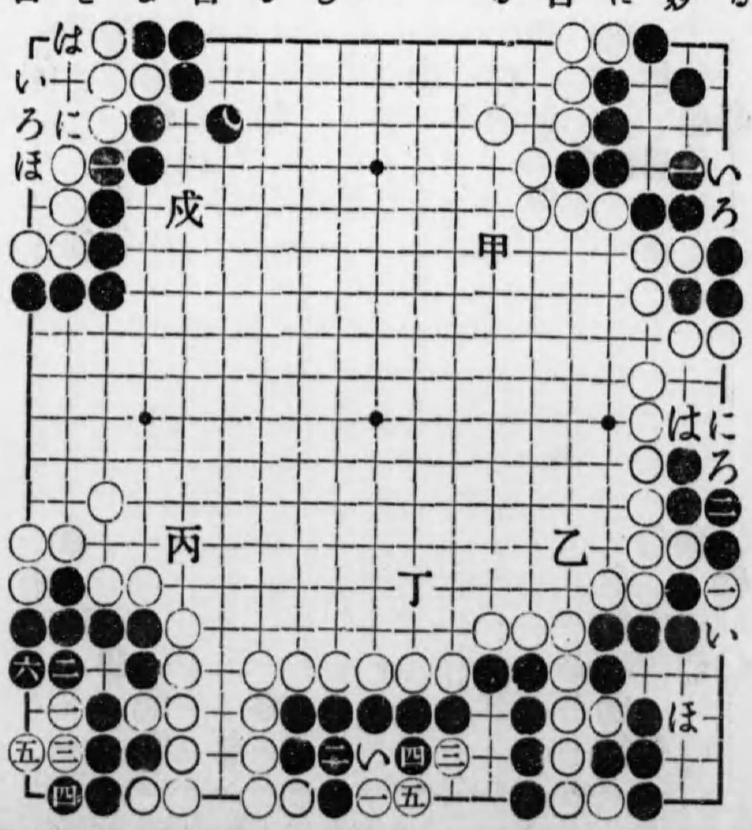
（第五十三圖說明）●甲隅は前圖に於ける甲隅の變化にして黒二の手大惡なるため黒死す但し黒四を五に打てば白四に打つべし●乙隅は白の五の點に黒のツギなきだけ甲隅と異れり此圖にては白は一と打ち三とキりて黒の五目をトルべし若し一を二の點に打たば●丁隅



第五十三圖

の如く黒より二と妙手を打たれて虻蜂トラずに終るべし●丙隅白一のとき黒二とツギたるは危險なり白より三と打たれ四のとき五の妙手ありて茲に六ケしき劫を生ず黒六を「い」にツゲば白「ろ」となり又六を「は」にトレば白「に」黒「い」の時白「ろ」となりて甚だ面倒なる劫となるなり

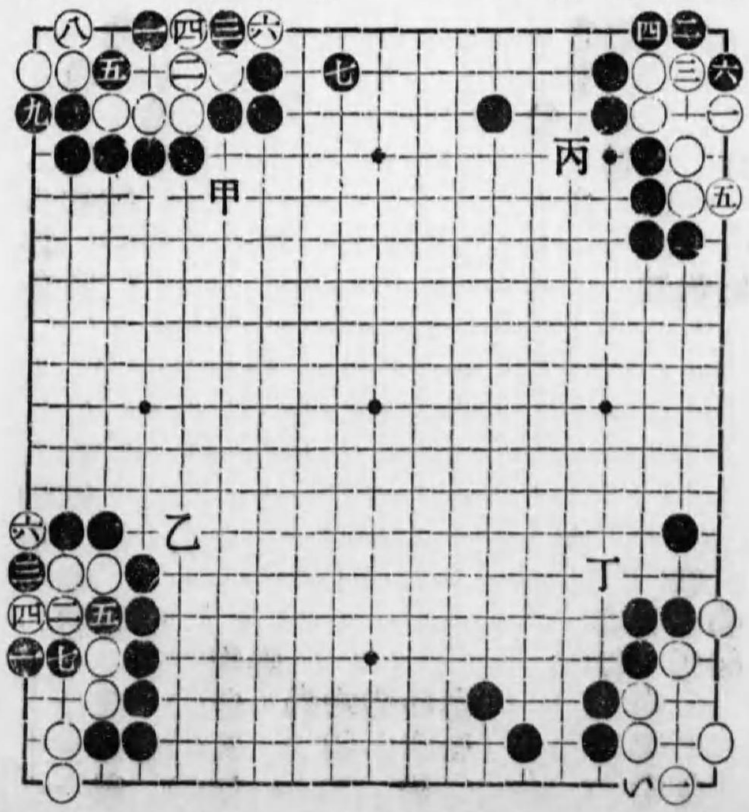
（第五十四圖說明）●甲隅黒の手番ならば一と打つべし一を「ろ」にツギては不可なり但し一を「い」に打つ方得なるが如きも後手なるが故一と打つ方却つて好きこと多し●乙隅白一のとき二とツグこと肝要なり又白一を二より來らば一にツグべし若し白一のとき黒二を「い」にトラば白二黒「ろ」白「は」黒一にツギ白「に」黒二にツギ「白」ほとなりて●丙隅の如くセ



第五十四圖

キとなるなり丙隅の如き九目の地がたちは黒手入を要する處なり●丁隅黒二とッギたるは惡し爲めに此處セキとなれり二を五に打ち白二に一目をトルとき「い」にアテ白ッグとき三に打つ方德なり但し圖の如く打てば四目の損なれども先手なる故に他に四目以上の手あるときは二とッグも宜しと心得べし●戊隅黒一と打ちたるはダメの如く見ゆるも實は先手一目の手なり白若し手抜せば黒「い」白「ろ」黒「は」白「に」黒「ほ」となりセキとなるなり是等各圖總て實地に出來る形なれば能く々々玩味ありたきものなり

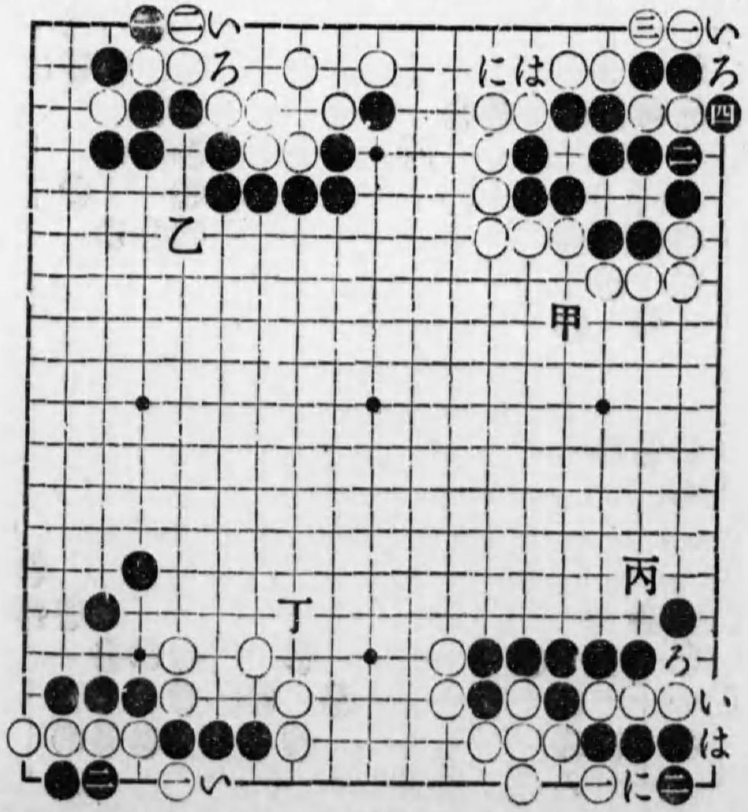
（第五十五圖說明）●甲隅黒一は所謂手筋なり是れ白の致命傷にして如何ともし難く終に死に歸するを見るべし初學者往々にして一を



第五十五圖

二に打ち僅かに一目をトリて甘んずるあるは大なる誤りなり●乙隅の一も白の爲めに致命傷たり圖の手順にて白死なり若し一を三より打てば白は一に打ちて活くる手筋なり●丙隅白一と打ちしは大に惡し宜しく三に打ちて確實に活くべき形なり一と打てば黒二の妙手にて以下白五黒六までにて劫死となれり●丁隅も白一と打ちしは惡しこは死活に關係なきも現在二目損なり「い」に打つ方二目の利なり本隅極めて初心の人の打棋に見受くる處なり

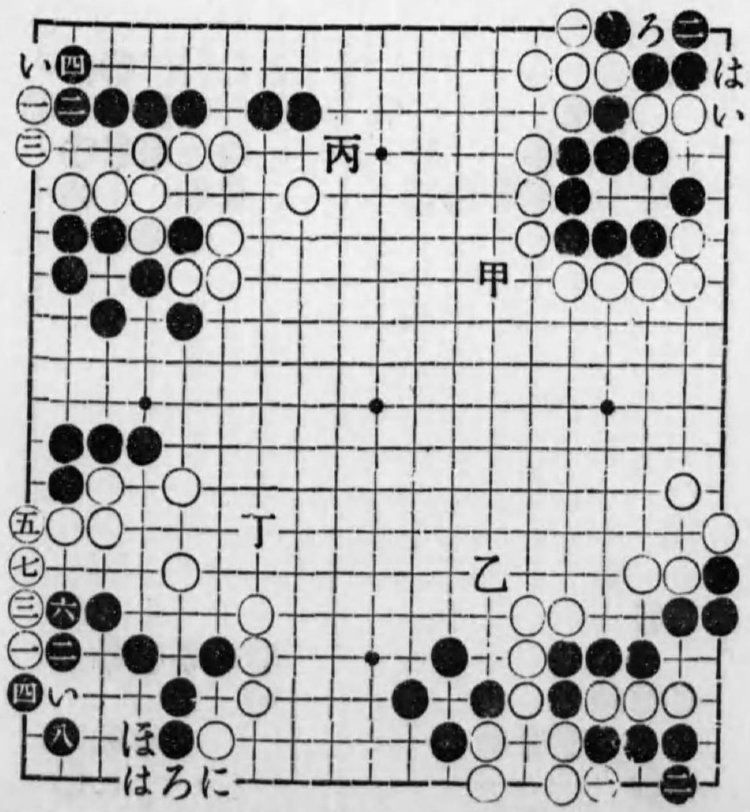
（第五十六圖說明）●甲隅白一の手常に用ふる妙手なり若し黒二の手を三に打たば白より「ろ」にハネられて劫となるべし黒四迄にて一段落なり併し他に好所なければ白は五の手にて「は」又は「に」に粘ぐべし然らざれば黒より



第五十六圖

機を見て「い」に打たれ劫にて一、三の二目をトラるべし●乙隅黒一のハネに對しては「いろ」の點にツグは愚なり二とオサへる方得なり其の時黒より「ろ」にキル手なければなり●丙隅白一のハネに對し黒は二とマガる手良し「いろは」の三點に打ちては白より二の點にトビツケられ黒「に」に打つ手なきを以て損と知るべし●丁隅は攻合なり白の一に對し黒は一考を要す若し「い」に打たば白二に控へて劫となるべし故に黒は白一の時直ちに二と打つべし

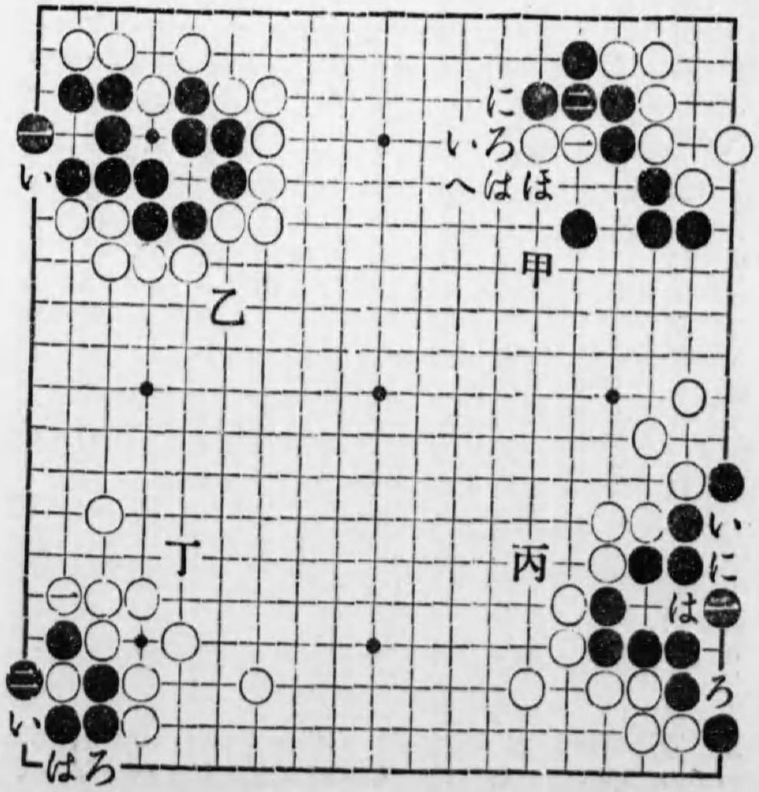
（第五十七圖說明）●甲隅白一の手非なり二の點に打たざるべからず果して二に打たば黒は「い」に打つの外なく依つて一と打たば黒の一目をとり得べし但白二と打ちしとき黒「ろ」



第五十七圖

にツガば白「は」にハネて劫となるなり圖の如く白一と打ちし時は黒二の手大に可なり●乙隅も甲隅に相似たる形なり白一は二の點に打たざるべからず一と打ちたるため黒に二と佳手を打たれたるなり●丙隅の場合白一を「い」に打つは面白からず後手となるを以てなり一と打つべき處なり黒二白三皆佳手なり●丁隅一より八まで皆普通の打方なり八を「い」にツグは惡し何となれば白「ろ」とハネ黒「は」の時白「に」にツギ黒「ほ」に手入を要すべければなり

（第五十八圖說明）●甲隅白一の手は俗にダメヅマリと稱し棋家の最も忌むべき手筋なり然るに初學の人往々此の禁制的の大惡手を敢てして更に顧みざるあるは何ぞや蓋し自石の



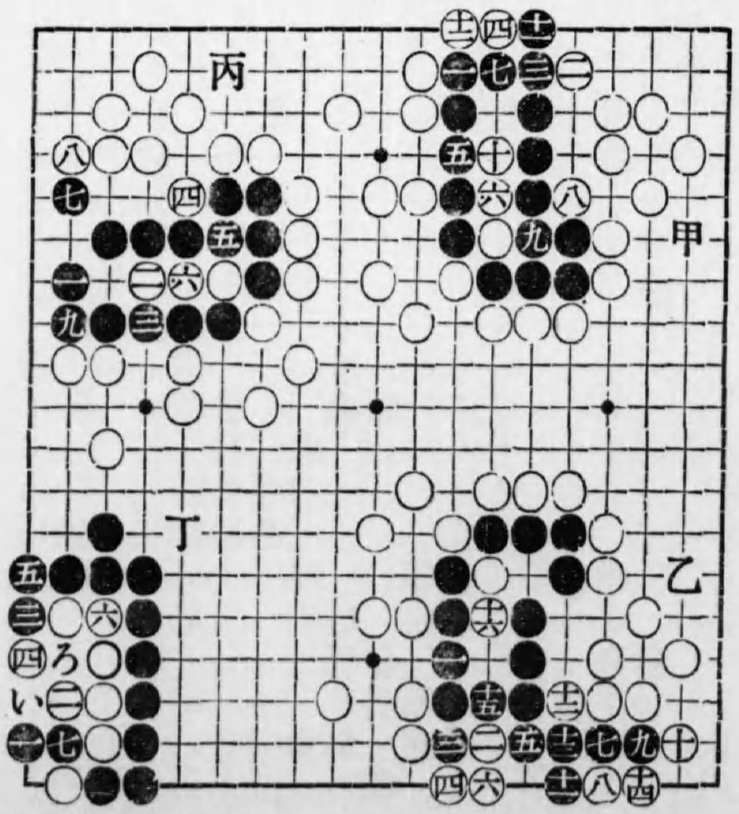
第五十八圖

保衛に害あるを悟らざる歟或人問ふて曰く白一の手を打ち黒二となるも白は三手のダメあり又一と打たずして捨て置くも矢張り三手なり何故に之れをダメヅマリと云ふ歟答へて曰く假りに白三の手にて「い」にトビ黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」となりたるとき白の手數を算へ見るべし一及び二の石なかりせば四手なるも一、二の二手を交換しあるため三手なるを知るべし猶之れに類せる手種々あるべきも今は心付ける一手を示して他の問題に移ることゝす●乙隅黒一の手は初學者の常に打ち出す形なり曾に損なるのみならず外側白の味に關すること少なからざれば必ず一と打たずして「い」と下るべきものなり●丙隅黒一は不必要の手なり手を抜くも此黒は活なればなり手抜のとき白「い」に來らば黒「ろ」白一黒「は」となりて白は「に」にツグ手なし假令此黒に手を入るゝとしても一を「い」に打つべきものなり●丁隅白一も大惡手なり殺し得べき黒の四目を態々活に就かしむるものと云ふべし白一を二に打ち黒「い」の時白「ろ」にハネれば黒は「は」にォサへること能はず從つて此の黒は活路なきものなり

（第五十九圖說明）●甲乙丙の三隅は同一のものにして其甲乙は黒の打方宜しからず爲めに白の巧妙なる手順によりて殺了せられたるものなり之を丙隅の如く一と好手筋に下さば白より如何とも手段の餘地なく九の手迄圖の如く運びて完全なる活形に就くべきを示せるなり●丁隅黒一の手筋宜しく爲めに白は如何に善計を旋らすも活路なく七迄にて死形定れり若し白二を七に打たば黒は同じく三とハネ

白四のとき五にッギ其の時白「い」に打たば黒「ろ」に打つべく白「い」に打たずして六に打たば黒二に打つべし此二と打つ手を誤りて「い」に打つときは白より二と打たれ切活となるべければ此の邊の注意肝要なり

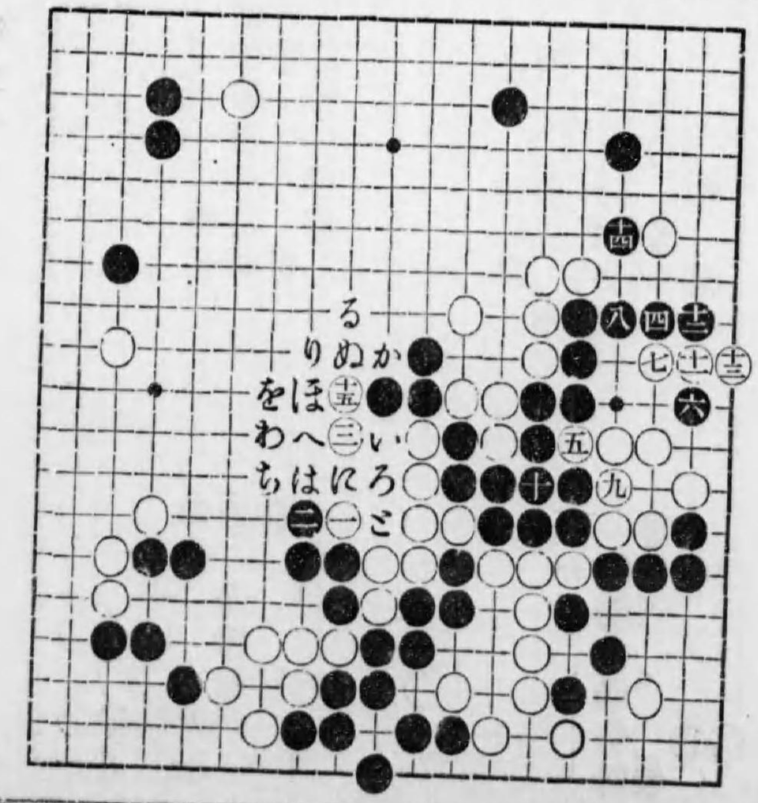
（第六十圖說明）前來掲ぐる所の諸圖多く稿を實戰に採れる者にて本圖亦近頃稿者と稿者に五子を布ける打棋に出來たる問題なり研究の餘面白き結果を得たれば茲に掲ぐることゝせり本圖十五の手迄にて白の形勢稍々面白く結局白中押の勝となれるものなるも一より十五迄の間相互に疎漏なる着手あり然れども右方五乃至十四迄の着に就ては今之を措て問はず中央部白の七子を遁ぐるに就て一と打てるは輕忽の甚しきものなり之を一と打たずして



第五十九圖

「に」の点にトバば悠に活路あるべし故に白一の疎着に乘じ黒奮發一番細考せば白の一團を擒にするを得べきと同時に勝敗地を替え大勢黒軍に歸すべかりしなり事茲に出ずして四乃至十四と打ち後手をとりて中央部に白をして先鞭を就け十五と打たしめたるは此の棋黒相當の時間と心力とを費やしたる點に於て殊に恨事となす由つて黒の勝つべき手段を左に示すべし白一黒三白三となれるとき黒直ちに「い」に出れば白「ろ」黒「は」白「に」黒「ほ」となりて白忽ち全滅すべし對局の當時白の謂へらく白三を「は」にハヌれば道路ありしに輕舉三とトどしは頗る危險なりき然るに後日に至り研究の結果は白三とハヌるも尙ほ黒に「へ」とハサム妙着あるを發見せり白「は」にハネ黒「へ」に

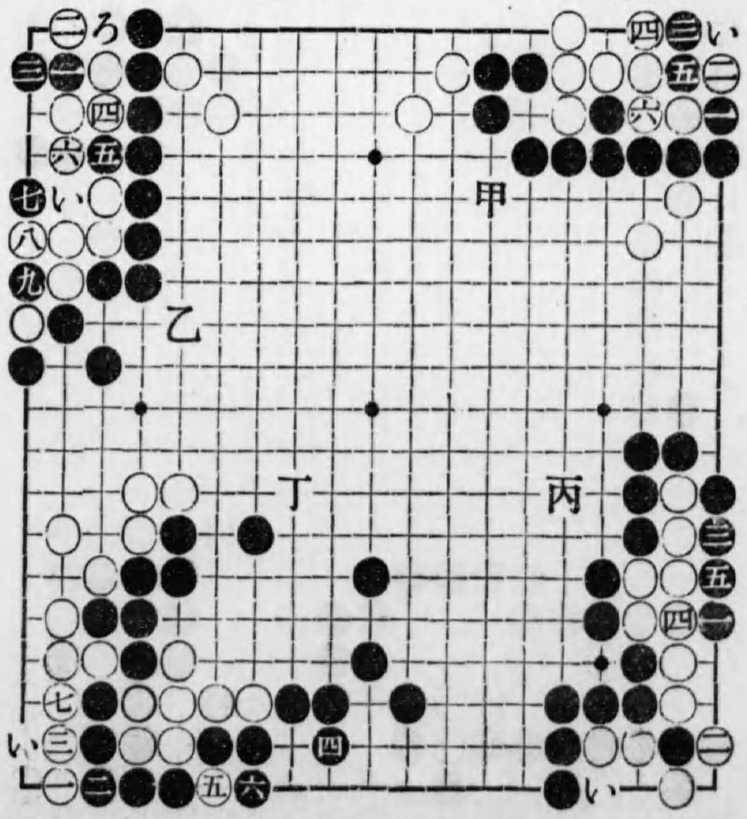
第六十圖



ハサミしとき白三にハネれば黒「ろ」にォクを良き手筋とす其のとき白「い」にッグの外なく依つて黒十五に止むれば「ウッテガエ」を以て此白擒了し得べし又黒「ろ」とォキしとき白「に」ッガんか黒乃はち「い」に打ち白「と」黒「ち」白十五黒「り」白「ぬ」黒「る」白「ほ」黒「を」白「わ」黒「か」となりて白軍降旗を掲ぐべかりしなり

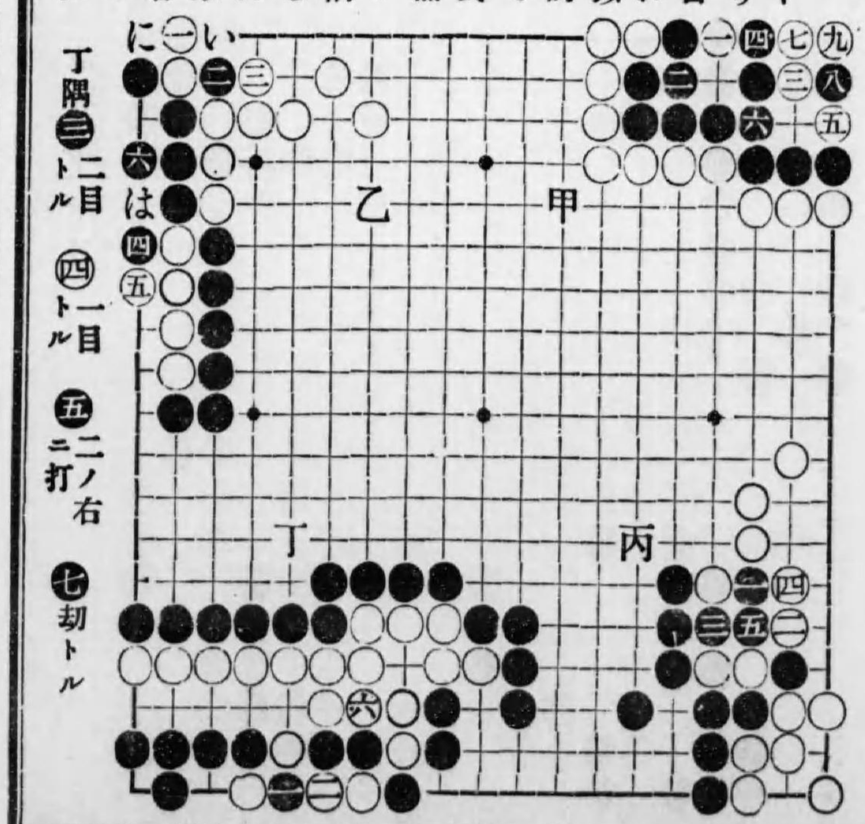
（第六十一圖說明）●甲隅黒一の手誤れり一を五に打てば手筋に叶ふべし從つて此白活路なからん黒一を五に打つとき白二に打たば黒三白四となり黒六白「い」のとき黒復た五の点に打たば白滅了すべし●乙隅黒一の手良し圖の如く九迄運びて此白刧死となれり若し白二を六に打たば黒七白二黒三白四黒八白九黒五白「い」黒「ろ」となりて白死すべし●丙隅黒一の手順悪し一を二に打たば白は一の點に打ちて活を求めざるべからず黒乃ち「い」と打ちて下方白の三目を獲べく大利なり●丁隅白一は良手也若し黒二を三に打たば白「い」にハネて

第六十一圖



劫となるべし又白一を誤りて三に打たば黒より一にハネられ茲に現在二目の損益を生すべし

（第六十二圖說明）　●甲隅黒二惡し圖の如くにて「セキ」となれり宜しく二の手を八に打ち白二のとき手を抜きて他に轉ずべし現在四目の利なり而して黒四を七に打つも「セキ」なれども是は後手となるべきを以て二とツギし以上は圖の如く打つの外なし●乙隅白一惡し爲に六迄にて一手寄せの劫となれり一の手にて四の點に下らば無事に隅の黒を獲得すべし其の時黒二とキレば白一に下り黒「い」白「は」黒「に」白「一の一路下」に打ち黒一に一目をトリしとき白六と打ちて攻合白一手勝なり●丙隅黒一は良着なり爲めに五迄にて夥しく白地を蹂躙することを得たり●丁隅黒一は最も刮目して覺るの價値ある手筋なり此手高級の棋家と雖も往々誤るなきを保せざるべし此の妙着にて大劫を生じ隅に於ける瀕死の黒は蘇生せんとし外側白の大石却つて危ふからんとす但

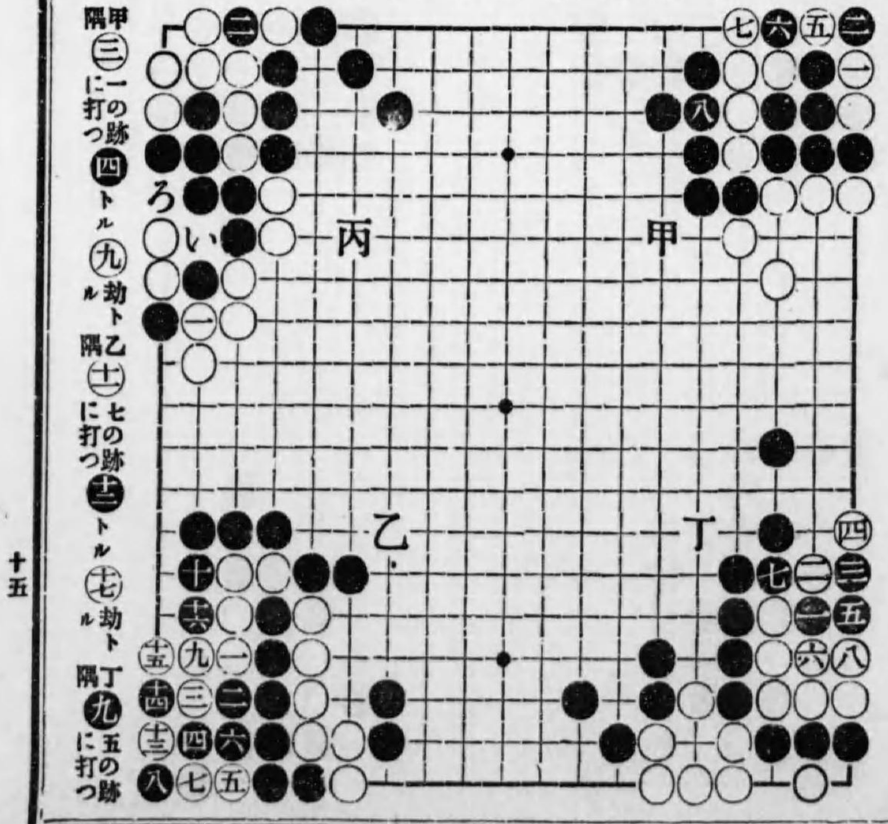


第六十二圖

し白六の手にて一の跡にツゲばセキなり

（第六十三圖說明）　●甲隅一見「眼アリ眼ナシ」にて白の四目死せる如く見ゆるも白一の手筋にて劫となれるなり凡て隅の手は多く「二ノ一」「一ノ二」に好着あるものと知るべし本隅一、三、五の各手皆「二ノ一」「一ノ二」の點なり●乙隅は甲隅と同じき手筋なれども範圍の廣き丈け難解に屬するのみ●丙隅は某三段の稽古碁に出來たる形なり白の一と打ちしは輕卒なり一を「い」に打ち黒「ろ」の時白「ろ」の下に打ち「い」にツギたる時白「一」に打たば黒より二と打ちて劫となす暇なかりしなり●丁隅白活なるが如くに見ゆるも黒一乃至三、五の手筋にて死となれり古書にもある形にして丙隅の手筋と酷似せり

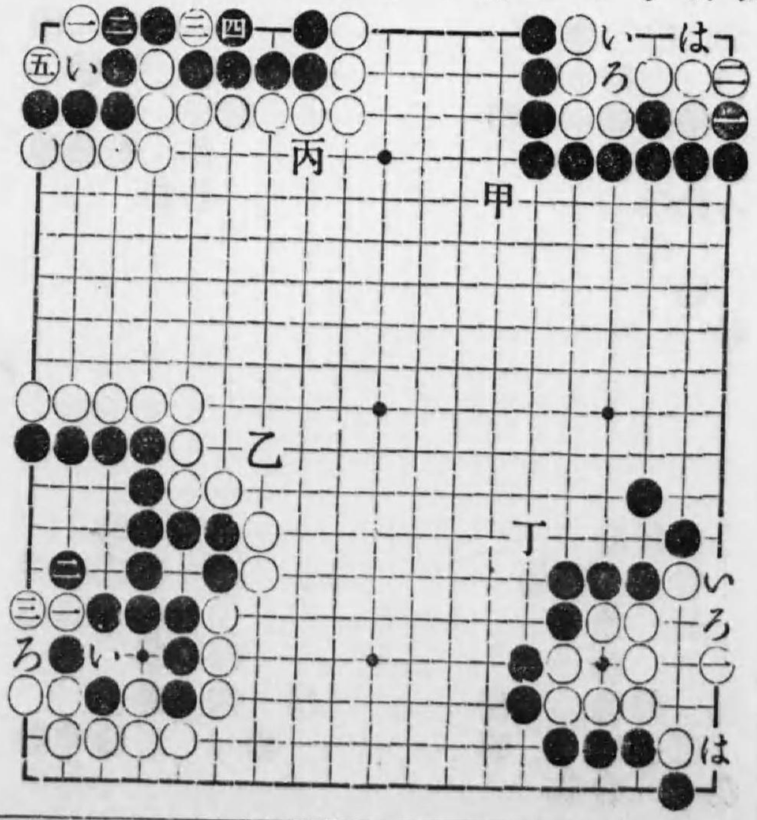
（第六十四圖說明）　●甲隅黒一は平凡にして不可なり之れを「い」に打ち白「ろ」の時黒二白



第六十三圖

一黒「は」と打てば此の白劫死となる所なり●乙隅はヨセの手にして一の手佳なり初學の人往々誤りて一を「い」又は「ろ」に打つが故に其の利少なし●丙隅は本來黒手入を要する形なり然るに往々彼我共に心付かずして終ることあり若し黒手入をなさざれば圖の如く五迄にてセキとなるべく白若し二を「い」に打たば黒五に打ちて劫なり●丁隅は白一の手を「いろは」の三點何れに打つも活は則ち活なれども黒をして先手に白の一目をトリ去らしむる不利あり此の塲合一の手頗る佳なり

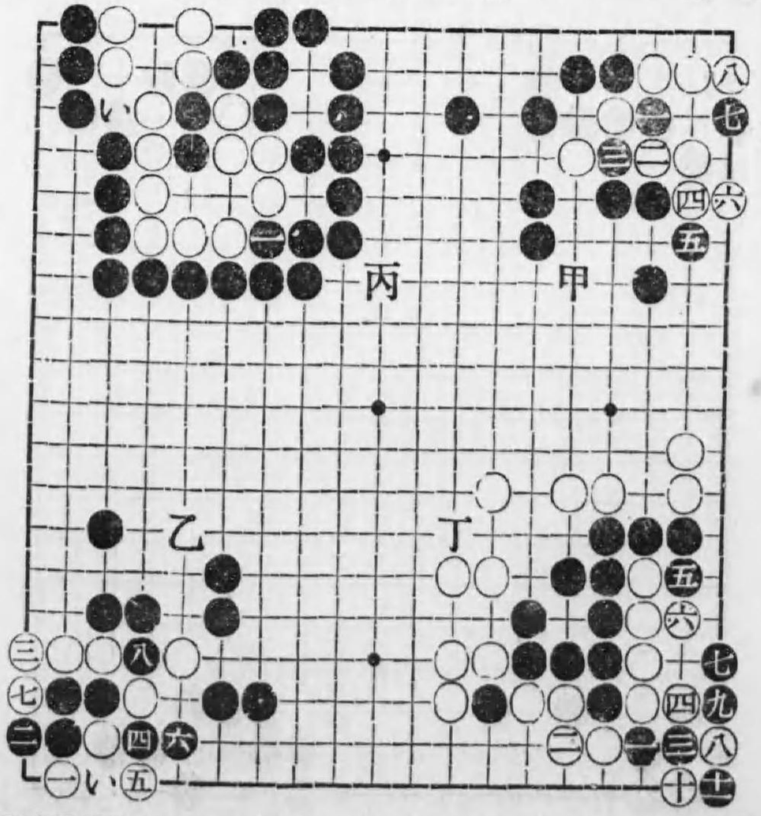
（第六十五圖說明）●甲隅の白は死石なり然るに黒一の手を誤りて白をして活に就かしめたるものなりこの一の手は手筋らしく見へて此の塲合大に不可なり一を平凡に四の點に打つべし左すれば白如何に打つも活路なし●乙隅黒二乃至八まで申分なき手筋なり若し誤り



第六十四圖

て二を四の點に打たば夫れこそ大變白より二と打たれ黒「い」にトル時七に打たれて白は劫活となるべければ此の塲合二と曲るの外なし矢張り六十三圖にて陳べたる一ノ二の點なるを知るべし●丙隅はヨセの圖にして黒が一と打ちしは一目の利なるが如きも實はダメなり何となれば假令白より一の點に打つも黒「い」に打てばツマリ白は手入を要する所なればなり●丁隅黒一乃至十一迄手筋良し是れにて劫となれり然れ共此の一團の黒若し活石なるときは五の手を九にハネて打つべし然らざれば白六の手にて八にハネ隅の二目をトルべければなり本圖の塲合白六を八にハヌれば黒は六に打ちて茲に一眼を作るなり

（第六十六圖說明）●甲隅白一惡しゝ爲めに劫となれり宜しく一を二にオキ黒「い」の時一に打ちて黒死するなり●乙隅黒一、三の手筋

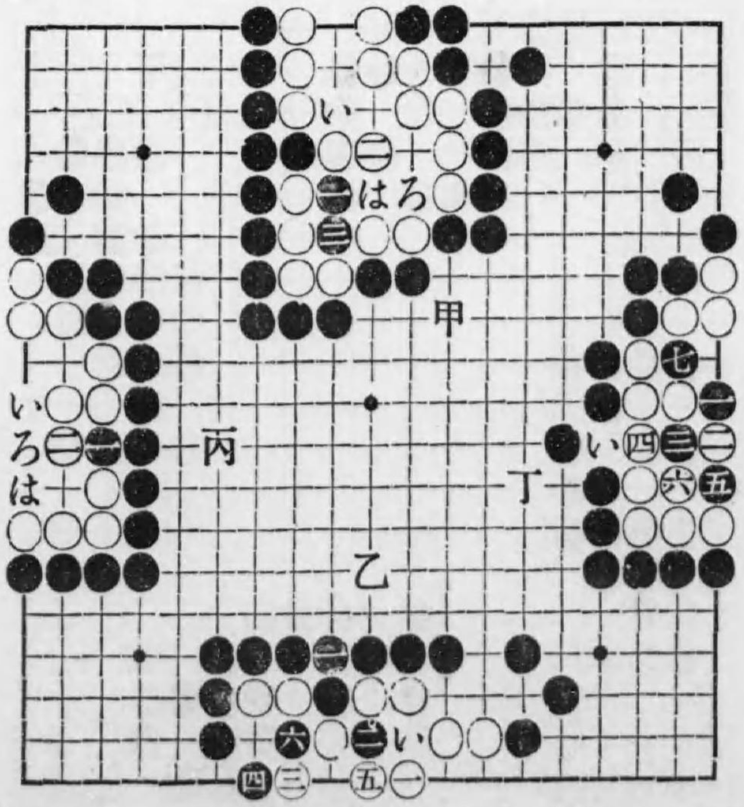


第六十五圖

にて活なり然れども是は單に活くる手筋あるを示せるものなれば全局の都合にて捨てゝ打つか活きて打つべきかは別問題に屬す假令活くるとしても時機の見計ひ肝要なり●丙隅黑一のカケツギ最も厭ふべき形なり後に「い」にハネ白「ろ」黑「は」白「に」となれる時白より「ほ」と打たれ黑「へ」にツゲば白「と」と打ちてセキとなるべき筋を生せん一とカケツグ形は此の圖に限らず「ち」に黑石ある場合は別として先づ打つまじき形と知るべし●丁隅黑一大惡にて白より二と打たれ死滅に歸せり一を三に打つの外なし本圖甲丙丁の三隅は簡易なる問題なれども記して初學者の參考とす

（第六十七圖說明）　本圖は皆初段に七子位の打碁に現はれたるものにて●甲は黑白双方此處に手あるを心付かずして打ち終れり黑にして圖の如く一とキラば多大の利を得べかりしなり乃はち白は二と打ちて四目を捨てざるべからず若し二を三にツガば黑は二の點にハネ白「い」にツグとき黑「ろ」にキリ白の全部死す又白「い」にツグ手を「は」にトレば黑「い」にキリ大劫となるなり●乙は白一の手惡しきため死したれども一を五の點に打たば黑は三に打つの外なく仍て白「い」に打ちて活くべかりしなり●丙は黑一と無造作に出でたるは大なる過失なり一を「い」に打たば白「ろ」黑二白一黑「は」となり五目ナカデにて白死すべかりしなり●丁は丙と酷似せるも「い」にダメを存するため白は活を保てるなり然かも猶圖の如くなりて三目をトラルるは免かれ難し

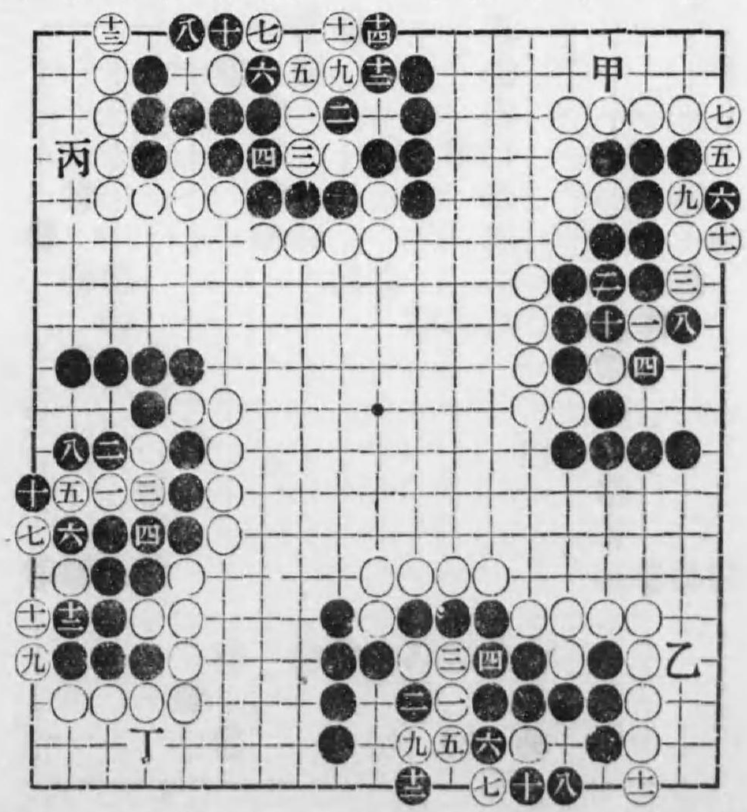
（第六十八圖說明）　●甲は黑單に二とツギしため少からざる損失を拂へり這隅の如きは上手より劫ダテに利用して一と打たれし時など下手の受け方誤ること多し總て劫ダテの受手



第六十六圖

第六十七圖

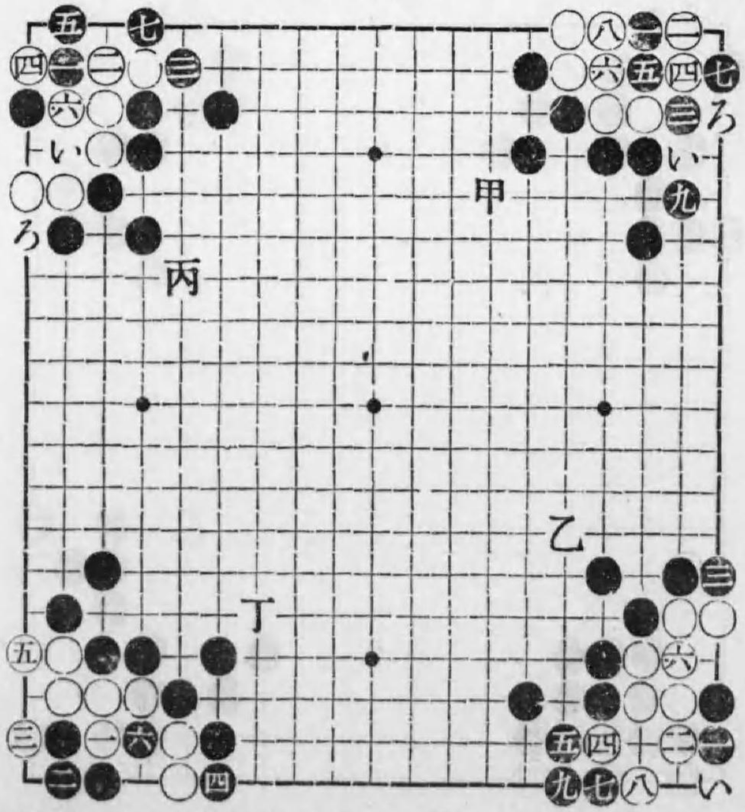
に際し深き注意を拂はざる時は往々にして刼以上の損害を蒙むることあり愼重を欠くこと勿れ依て黑二を●乙隅の如く打つべし但し乙隅に於ける白は十一の手にて十二の點に打つ手段あり左すれば白は同じく死たるを免かれざるも●丙隅の如くなりて兩刼の味生ずるを以て茲に無盡藏の刼ダテを保有して所謂刼封じの碁となるべく黑は大に打ちにくきものなり若し他に刼の起ることもあらんか黑は其の刼を白に讓るか左なくば此隅に刼を移すかの二途となるべく相手の强ければ强き程實に氣味の惡しきことなり故に仔細に研究し來れば黑は須らく尠少の損を忍びて之を●丁隅の如く受け置くを本手とす丁隅白十一黑十二となりても僅に二目の損失に過きず況んや黑は十二にて一時手を拔き他の好所を打廻し後に十二に打つ手順もあるべく又全然十二の點を白



第六十八圖

に讓りて他の得と振り替る手段もあり若し又白より十一を打たざらんか黑時機を見て十一にオサフれば殆んど先手に打ち得べく要するに多くも二目の損失に過ぎず動もすれば些の損失なくして了るを得べし

（第六十九圖說明）　本圖は各隅とも白を殺すべき手筋を示せるものなり●甲隅若し白二を三の點に打たば黑二に打ち白六黑「い」白「ろ」黑四にて死なり●乙隅は甲隅の變化にして黑九迄にて白死なり白十を「い」に打たば黑刼をトリ兩刼にて白活路なし●丙隅白四は面白き手筋なるも黑五の妙着ありて白死了せり白四の手にて五の點に打たば黑は四に打ち白七に打つとき黑「い」にキリ白六のとき黑「ろ」と打つなり●丁隅白一のとき黑は二と打ちて可な

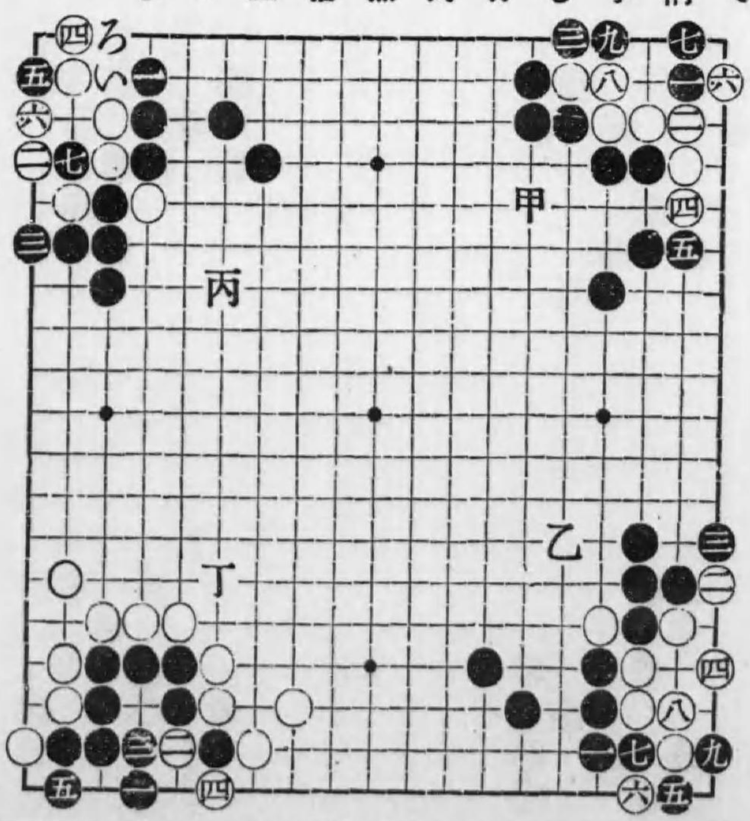


第六十九圖

り本隅は丙隅の變化を示せるもの而已

（第七十圖說明）●甲隅黑の手筋絕妙にして爲めに白は手の出すべきようなく全く此一隅を委棄するの止むなきに至れり●乙隅黑の手筋宜しきに叶ひ白は兩劫の死となれり白若し六にて八の點に打たば黑は矢張り九の點に打つべし●丙隅は乙隅の變化なり黑七迄にて同じく白死せり白四の手にて「い」に打てば黑「ろ」白四のとき黑五に打つべし●丁隅は黑活きの手筋を示す黑一の手妙なり若し白二を五に來らば黑は四の點に下るなり一の手を外に打てば死或は劫となるなり看官玩味ありたし

（以下次卷）



第七十圖

問題に就て

第二卷より掲げたる本問題は可成出來易き形勢或は實際の打碁より採錄せるものなれば棊勢單純にして且手段一樣に流るゝ嫌ひなきにあらざらん然りと雖も一定の手筋を會得するが目下の程度にては甚肝要にして深遠なる不可思議の問題を課するには勢ひ假設的棊勢に據らざるべからずして是等は諸子の今より更に進歩したる後に於て攻究せらるゝも決して晩きにはあらず故に本書に掲ぐるところは棊勢手段共に甚簡單なるものゝみを擇べり而して左の條項は心得のために記せるものなれば必ず一讀あらんことを望む

一、問題を解釋するに當り其棊形を秤面に双るは仔細なけれども何の腹案もなく輕卒に棊子を下し漠然解を試むべからず宜しく沈思默考恰實戰に臨むが如き心得を持し算定りて後にあらざれば決して棊子を下すべからず

一、問には殆皆（卷二、卷四の問題も然り）單に「結果如何」として詳記せざりしは學者をして如何に手段を生じて死活等の變を惹起するかの狀勢を看取せしめんがためなり

一、問題中、手ほどきの部に出せるものと同形のもの一、二なきにあらず、こは種々の方面より反覆練習を要する常用の手筋なればなり

問題附解

甲。黑先にて結果如何

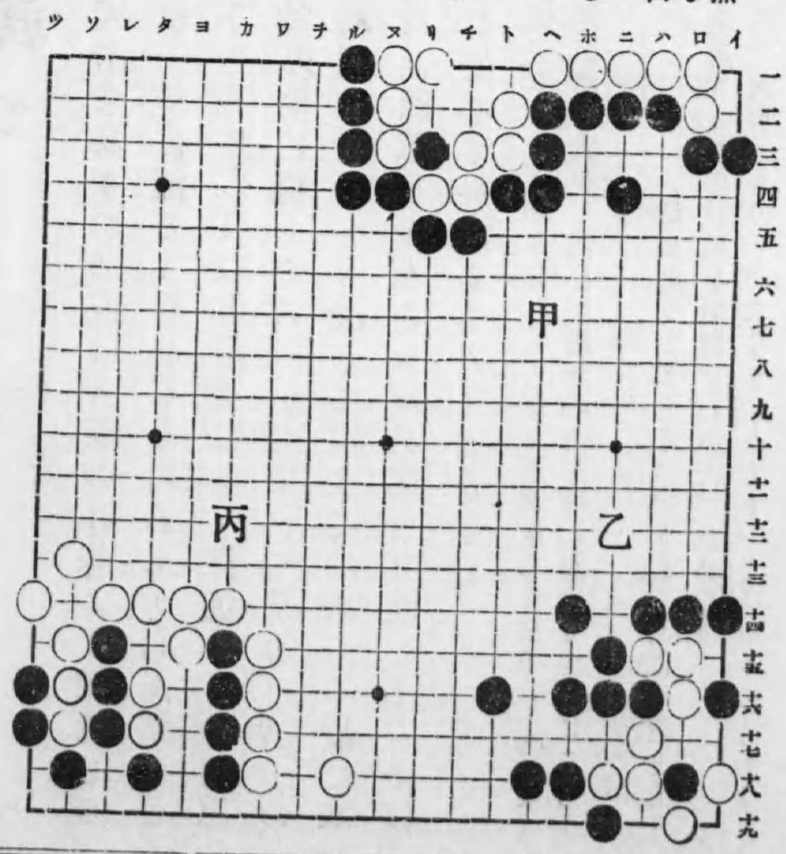
解。黑「チの一」にツケ白「リの二」に提り黑「トの一」にウチカキ白の大石死となるなり又最初黑「リの二」に打ち二目にして白に提らせ夫れより前の如く「トの一」にウチカキても白死なり尤白「チの二」に提らずして「チの一」に引かば黑「イの二」に打ちて眼を缺くこと勿論なり本問は黑が「チの一」より延ひて「トの一」にウチカキたる時ダメヅマリと黑「イの三」に下りあるため白が「イの二」に眼を持つ能はざることが主要の點なり此の如き下りは間々手を生ずること丶知るべし

乙。黑先にて結果如何

解。黑「ロの十七」に刺し白「イの十七」に提りし時黑又「ロの十七」にウチカキ之にて白死すダメヅマリも「イの十四」の下りある關係は矢張甲。と同じ

丙。黑先にて結果如何

解。黑「レの十九」に眼做りて活なり若し此手を「カの十九」に下らば白「ヨの十七」黑「ヨの十八」の時白より「ツの十八」にウチカキ黑「レの十九」に提る此時白「ソの十九」にオキ黑死なり



問題附解

甲。白先にて圍中の四子を逃れんとす手段如何

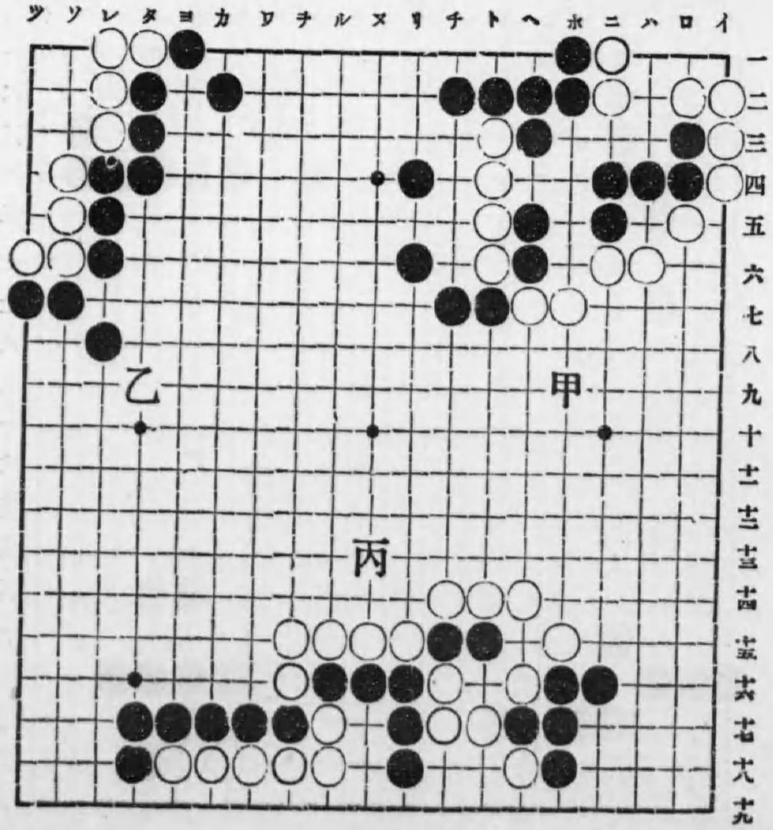
解。白「ヘの四」に突き出し黑「ホの五」にツギ白「ニの三」に突き當り黑「ホの三」に應じ白「ホの四」に切り黑「ハの二」に刎ね込みし時白「ロの一」に下りて攻合は四手三手にて白の方勝ち黑の八子を獲べし此「ロの一」に下る手が面白し若し過ちて「ハの一」に受れば黑より「ロの一」にウチカヘされて追落となり白敗走す注意すべし

乙。黑先にて此隅の結果如何

解。黑「ツの二」にオキ白「ツの三」にカケツギ黑「ソの一」にコスミツケ白「ソの三」にツギし時黑「ツの四」か「ツの五」に入れば持(セキ)となる又最初白「ツの三」にカケツガずして「ソの二」に應ぜば黑は「ソの一」に打ちて劫となす手あり然し劫となりては白大變ゆる持として六目の損にてすますなり尤外にダメあれば黑に手なし尙變化は種々試みよ此形は往々出來ることあり

丙。黑先にて圍中の五子を逃る手段如何

解。黑「ヘの十九」に綽ね白「トの十八」に粘ぎ黑「トの十九」に出で白「チの十九」に約へ黑「ホの十九」に粘ぎ白追落となるを以て「チの十八」にツグ能はず因つて黑の五子は外部と連絡するなり



問題附解

甲。黑先にて結果如何

解。黑「ニの一」にオキ白「ホの二」に曲りし時黑「ヘの一」に綽ぬれば白「ホの一」に打つも黑は「ホの三」或は「ニの二」にアテヽ白を殺し得べしされば白が「ホの一」に打たずして「ハの一」にカケツギも黑は「ヘの一」に連絡して白の眼形を缺くを以て結局白は死す本問は最初黑が「二の一」にオクが急所の手なり若し此手を「ヘの一」に綽ぬれば白より「ニの一」に打たれて活きらる即ち「ニの一」の點は手筋なることを知るべし

乙。白先にて此隅黑の死活如何

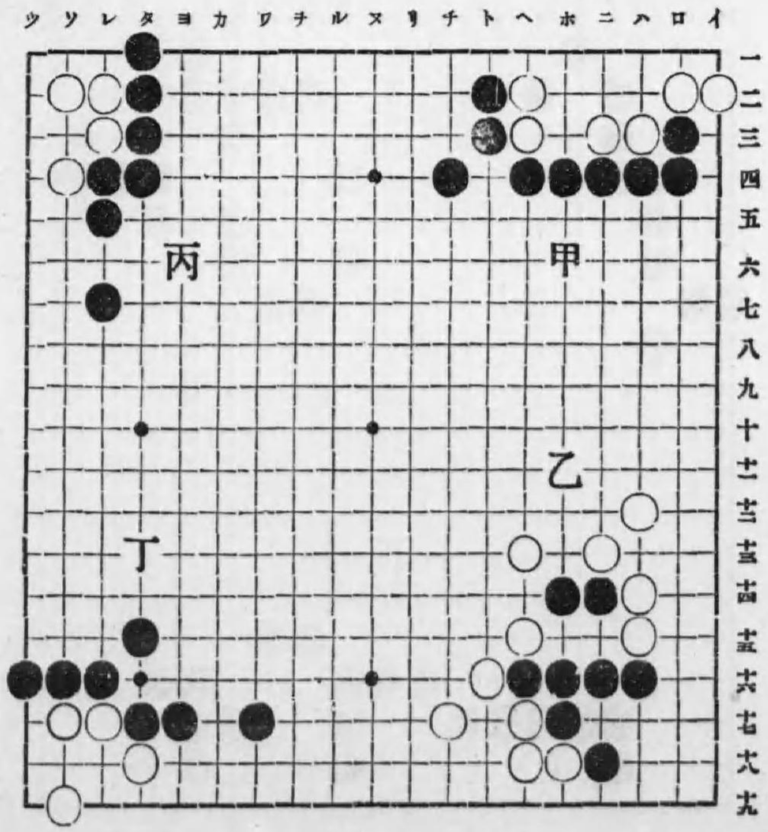
解。此隅は置碁の項行定石に出來る形なり白「ロの十八」にオキ黑「ロの十六」に下り白「ニの十九」に綽れ黑「ハの十九」に約へ白「ハの十八」に切り黑「ホの十九」に提り白「ロの十九」に曲り黑「ニの十九」に粘ぎ白「ニの十七」に目を潰ぶし黑「ハの十七」に提り白「ヘの十九」に押し黑「ニの十七」に四目粘し時白「ロの十五」に抑へて黑死す最初白が「ロの十八」にオクが手筋なり若し此手を「ハの十八」に頂れば黑より「ニの十九」に下られ白「ハの十七」に立つも黑に「ロの十八」と頂くる妙手ありて黑を活かすことゝはなるべし黑「ロの十六」に下らずして應する他の變化は宜しく試みよ

丙。黑先にて結果如何

解。黑「ヲの二」に頂け白「ツの三」に約へし時黑「ソの一」に綽れて劫となる「ツの二」の頂けは常用の手筋なり

丁。黑先にて結果如何

解。黑「ツの十八」にオキ白「ツの十七」に打ちし時黑「タの十九」に頂けて白死す此「タの十九」に頂くるが常用の手筋なり此隅は丙隅の形を少しく變化せるものにして此両隅は合せて手筋を記憶するを要す餘の手段は種々に研究すべし



問題附解

甲。白先にて結果如何

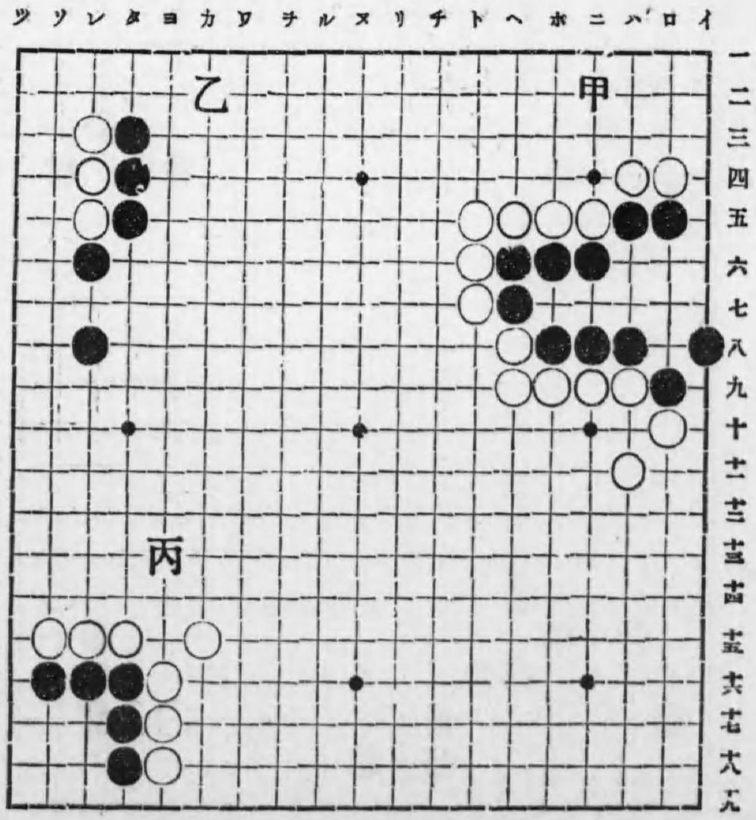
解。白「ロの七」にオキ黑「ロの八」にツギし時白「イの六」に尖みて黑悉死す此尖みは常用の手筋なり注意すべし

乙。黑先にて結果如何

解。黑「タの二」に下り白「ソの六」に綽れ黑「ソの七」に約へ白「ソの二」に尖み黑「ツの六」に綽れ白「ツの三」に尖み黑「レの二」にアテコミ白「ツの五」に約へし時黑提らずして(提れば白に劫にせらる)「ソの四」に點すべし然る時は白死なり最初黑が「タの二」に下る手(レの二に綽るは宜しからず)及「ツの六」と下より綽ぬる手等心得べし本形は互先碁にて黑小目にあり白普通に掛り黑二間夾となし夫れより白は二度手を拔き黑より掛りたる石の頭に頂けられ又外より約へられたる形なり

丙。白先にて結果如何

解。白「ソの十八」にオキ黑「ソの十九」にツケ白「レの十八」にツキアタリ黑「レの十九」に盤り白「ツの十六」に綽れ黑「ソの十七」に曲り白「ツの十七」に出てし時黑「ツの十八」に打ちて劫となる此隅は一合桝(イチガウマス)と稱へて必要なる基形なれば注意し置くべし尙變化は數多あれど目下の程度にては少しく困難なるべければ絮說せず只前陳の白「ツの十七」に出ですして「ツの十八」に下らば黑「ツの十七」に打ちて持となるなり



問題附解

甲。黑先にて結果如何

解。黑「ホの二」にッケコシて此隅活なり餘の手段は隨意に學者の研究に任ずること丶し解説せざるを以て宜しく試みよ此ッケコシは毎々用ふる手筋なり

乙。黑先にて結果如何

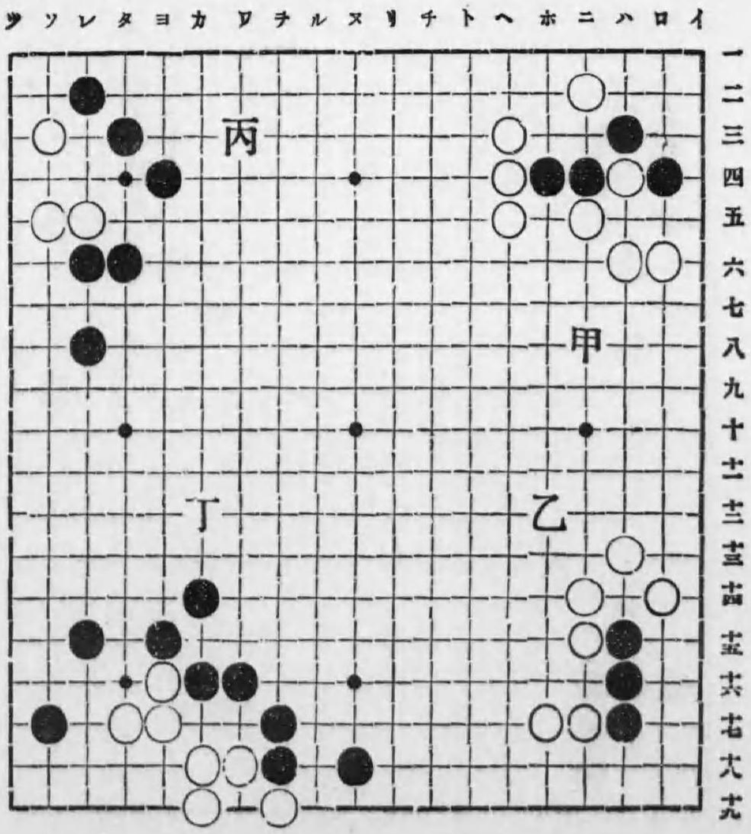
解。黑「ロの十八」に尖み白「二の十八」に曲りし時黑「イの十七」に尖みて活なり此尖みは何れも手筋なりこれも甲の如く以下の應接は試るべし

丙。白先にて結果如何

解。白「ソの二」に約へ黑「ソの一」に綽ね白「レの三」にアテ黑「ヨの二」にカケッギ白「タの五」に出で黑「ヨの五に」約へ白「ソの六」に曲り黑「ソの七」に約へし時白「ッの四」にヘコミて活なり此隅は互先碁に出來る形なり

丁。白先にて結果如何

解。白「ソの十六」にッケコシ黑「レの十六」に約へ白又「ソの十六」にッケ黑「レの十七」にッギ白「レの十八」に約へ黑「ッの十八」に綽ねし時白「タの十九」にカケッギて活なり



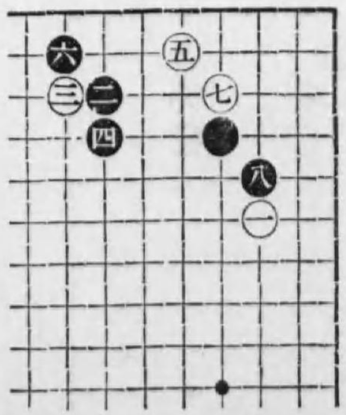
初學上達捷徑（其五）

●第百二十四圖　黑四と伸るは緩けれども白の大斜走頂けに常用の應手なり白五は形ちなれば間々打ち來るなり黑六の綽ね宜し白七に對する黑八の手面白し斯く打たれては白の當惑察すべく黑の利勢となるや知るべし次ぎの圖に據りて考ひ見ば了解殊に速ならん

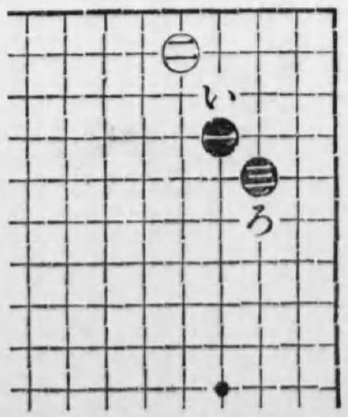
●第百二十五圖　「い」と「ろ」とは共に白と假定せば「い」と「ろ」との白は恰互先大斜走締（「い」は小目「ろ」は大斜走）なり此處に黑が一と頂け來りたるに白が二とコスム受け方やある前圖白七は本圖の「い」白一は「ろ」置石は黑の一白五は白二黑八は黑三に相當す以下如何に手段するも此大斜走締りは破損すべし

●第百二十六圖　前圖に於て白の七に對し黑は「い」にコスミックべき手筋なるを説きしが然らば本圖の如く黑八と下らば如何といふに白より九と綽ねられ黑「ろ」と綽ぬれば白に「は」と切られて紛れを生ずべくさりとて「は」にマガルも形惡しく因て「に」にックル位のもの

第百二十四圖



第百二十五圖

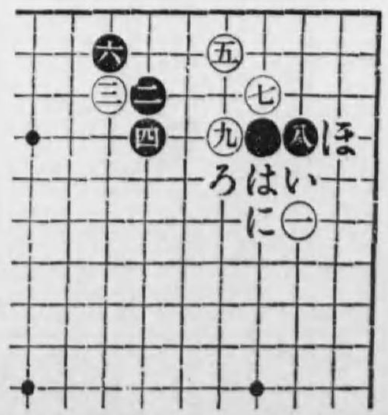


なるべけれど兎に角白に趣向せらるゝことゝはなるなり又八の手にて九に引かば白に八と打たれて面白からず初學の内には「は」にナラブ人ありそれにても白に「ほ」と盤られて思ふに任せず故に前圖の如く八の手は「い」にコスミックルを以て最善しとするなり

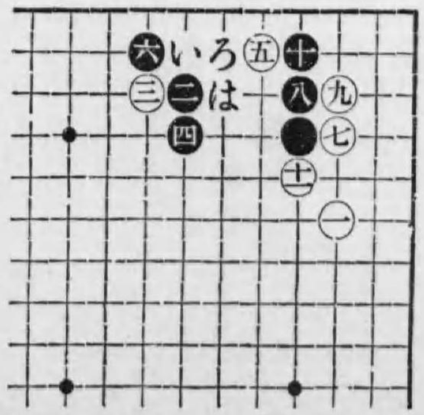
●第百二十七圖　白五及び黒六の綿ねは共に第百二十四圖より現はれたる手にて白五の手は形として黒の應手を試むる慣用の手段なれども實は矛盾の嫌ひあり之に對して黒六の手は初學往々「い」に下るか「ろ」にコスミックルか甚しきに至りては「は」にマガリて應ずるの弊あれど是等は皆宜しからずと知るべし白七のツケに對し黒八と讓歩しても五の白を得るを以て（五の白を活くれば外勢黒に歸すこれ矛盾となる理なり）仔細なけれども（本圖は卷の四第百十五圖と類似せるも白五と黒六の綿ねとの交換は大に其意味を異にす）次圖の如く八の手にて九に約へ一戰するも妙なり

●第百二十八圖　白九と切りたるとき黒十と下りしは善し白十三、十五無理なり黒に十六と切られて施す術なし若し「い」に粘がば黒に

第百二十六圖



第百二十七圖

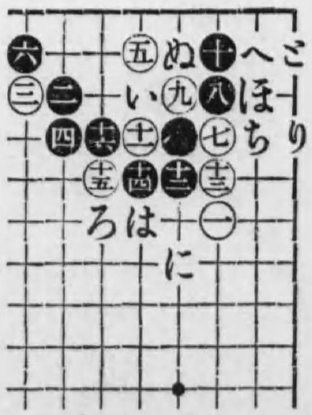


「ろ」と綿ねられて十五の白を征せらる假令征せられずして「は」にマガラルゝか「に」に飛ばれても切られたる五、九、十一の白は黒の八、十と攻め合ひ手足らず尤「ほ」に綿ね黒「へ」に約へし時又「と」に綿ね黒「ち」に切りし時「り」に受けて劫となす手なきにあらねど到底無理なれば先づ用ひ難き手段と看るを得べし白十七の手にて「ぬ」にグズマば黒「へ」にマガルべし之にて攻め合ひ黒勝なり「へ」の要點なるは卷の三第六十圖に於ても既に說きしことあり次ぎに黒十を十一に打たば如何次圖を見よ

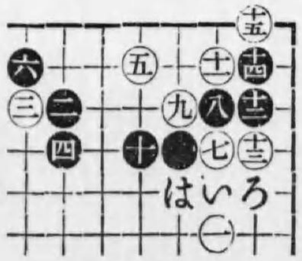
●第百二十九圖　黒十は十一に下らざるべからずとは今述べしところにして圖の如くなりては黒甚惡し又黒十二の手にて「い」にハネコムも白は十二に八の一子を提るべし黒「ろ」に下るも白「は」に切る手ある場合もあり何れにしても黒損と知るべし

●第百三十圖　白十三と下りより第百二十八圖と變化す黒十六の打込み面白し白十七を「い」に提らば黒十七にアテ白十六に粘がば黒「ろ」又は十八の何れに攻むるも勝なり黒十八も亦面白し白手を扳かば「は」か「に」に打つを以て白先手を取る能はず此手にて

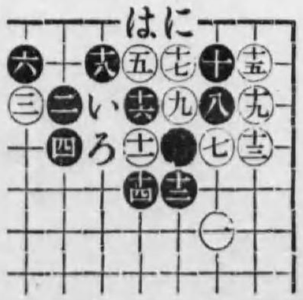
第百二十八圖



第百二十九圖



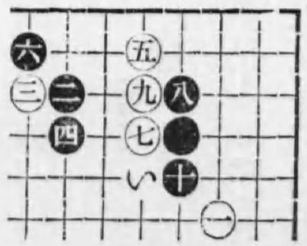
第百三十圖



「ろ」に提るは緩にして惡し

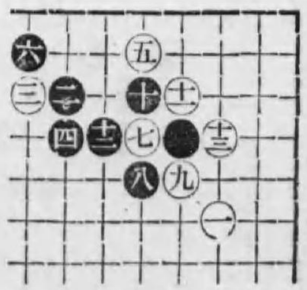
●第百三十一圖　白七と頂くるも往々打つ手なり之に對して黑は八と覗き白を九に續がして十と伸び出づるが宜し八の手にて「い」に綽ぬれば白より十に切られ白をして形勢を得せしむることゝなる説明次圖に讓る

第百三十一圖



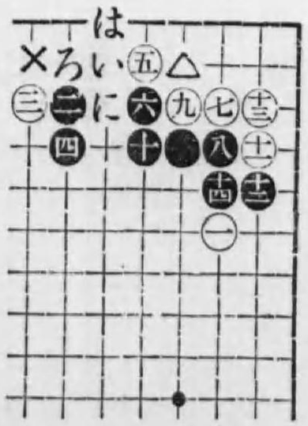
●第百三十二圖　前圖の如く八の手は十一に伸ぶべきに斯く打ちたるため白より九に切られて黑十三に下れば白より十一に綽ねられて惡しく又十一に伸びれば十に續かれて面白からざるなり譜の如くなりても白に良形を構成せられ隅地を占領せられて損なり故に白より七と打たれたるときは前圖の如く打ちて九と切られぬ樣にすべし

第百三十二圖



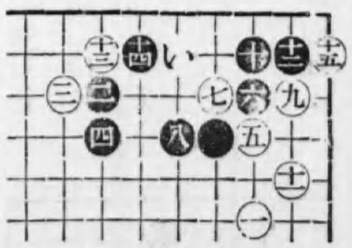
●第百三十三圖　白の五に對し黑六と斯くコスミッケて應ずるも面白し黑十二の手にて「い」に抑ゆれば白に十二に引かれて通常損と知るべし斯くなりて隅は白に與ふるも外面堅固となるを以て頗佳なり本圖に於て白「い」に出づれば黑「ろ」に抑ゆるなり又「ろ」に綽ぬれば「い」に綽ね込み白「は」黑「に」と粘ぎて△印と×印に切味殘りて白發展する能はざるなり

第百三十三圖



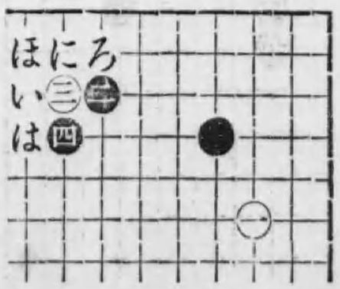
●第百三十四圖　前項に於て數々説示せるが如く白五の手にて「い」に打つも好果を收むる能はざるは理の當然にして第百二十七圖の説明中三と五との手段矛盾せりとの意味釋然たるものあるべしされば此圖の如く隅は黑地に委するの法を取りてこそ然るべしとは結論するを得べきなり

第百三十四圖



●第百三十五圖　白三と大斜走頂の最初(第百二十四圖)に於て黑四の綽ねの烈しくして善きことを述べしが白五の手にて「い」に引かば黑は「ろ」に下りて可なるは(同圖)既に諸子の記せるところなるべしされば白「は」に綽ぬれば如何然るときは黑「い」に切り白「に」に下りし時黑「ほ」に抑ゆべく之にて白に打つ手なし故に白「は」に綽ぬる手は通常の場合にはあるべからず因て「に」に下らば如何

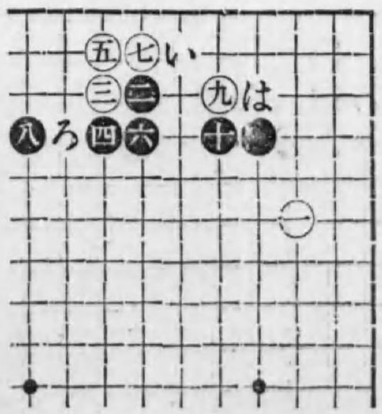
第百三十五圖



次圖に説かん

●第百三十六圖　白五と下るは低くして惡手なり黑の二より白の七までの錯綜したる姿形は均しくして黑は上部に面し白は低部にあり即ち一は表通にして一は裏通なり其價値の差著しきものあるは誰人

第百三十六圖



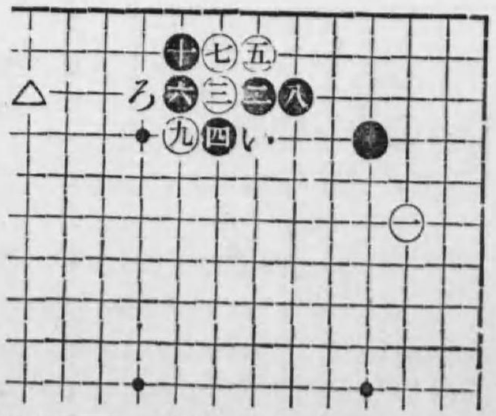
にありても其の然るを察知し得べし黒八の手善し此手を「い」に約ゆれば白に「ろ」に綽ねられ後に九の處に打たるゝ筋ありて面白からず黒十は場合により「は」に抑ゆることもあるべし

●第百三十七圖　白五の手にて七に下りて打つときは前圖の如くなりて白屈し面白からざれば斯く五に綽ねて黒の應手を試むることあり其時黒は譜の如く烈しく白を壓迫して擒殺すべし六の手にて「い」にッグが如きは緩なりと知るべし尤左方△の邊に白あれば白九と切らずして「ろ」にッケ三子を免るを得るなり注意すべし

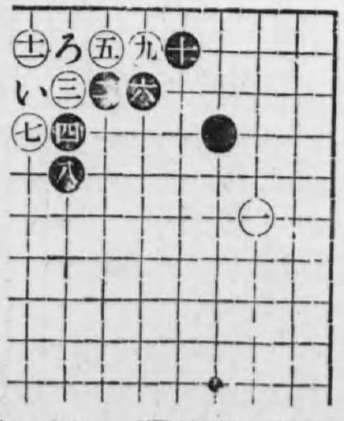
●第百三十八圖　此の定石は古來の定石書に散見するところなるが前圖と比較せば如何にも黒從順にして白をして思ひの儘に形勢を得せしむるものゝ如し若し黒八の手にて「い」に切り白「ろ」に粘し時黒が十一の處に抑ゆれば前圖と同一の姿になり白大に窮すべし故に定石に泥まず自力を發揮するは極めて肝要なり所謂「定石通の力なし」とならざる樣心掛くべし

●第百三十九圖　前圖八の手より變化せしなり此の手は前の如く

第百三十七圖



第百三十八圖



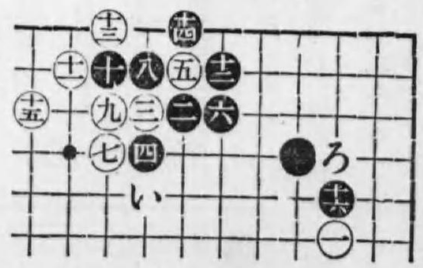
「い」に伸びるか或は九の處に切る方可なれど場合により斯く打つもなきにはあらざらん黒十六のコスミッケ善し之を打たざれば白より「ろ」にッケられて凝らさるゝこと多し

●第百四十圖　白五の切り無理なり黒六の應手宜し此形勢にて白「い」に切らば黒「ろ」に伸び白「は」に續きし時黒「に」に下り白「ほ」に曲らば黒「へ」に飛ぶなり「へ」に飛ぶ手は良好の姿勢なり又最初白「い」に切らずして「ろ」に綽ぬれば黒「と」に引きて差支なし

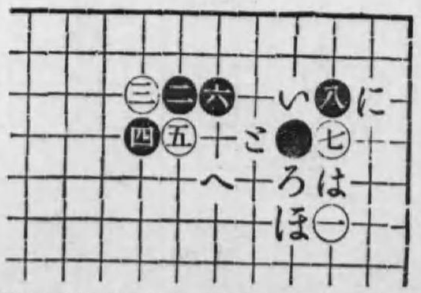
●第百四十一圖　白五の手筋は既に委しく掲示せしところにして黒四の手が△印に行びありても好結果を得ずと說けり然るに斯く四が烈しく綽ねありては六と三の白を抱へても手割に當るなり又「い」にコスミッケ打ちても黒惡しきを見ず餘は前例に鑒みてさとるべし

●第百四十二圖　白五は俗にコシラヘ手と稱する極めて俗惡の手にして趣味なきこと夥し圖の如くなりては白は如何ともすること能は

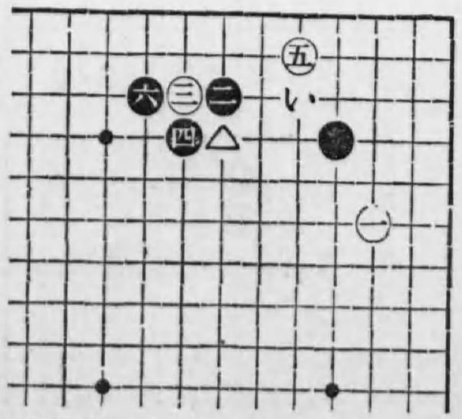
第百三十九圖



第百四十圖



第百四十一圖

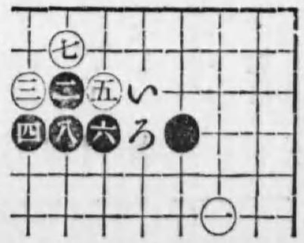


ず又假令白七の手を「い」に伸びるも黑は「ろ」に續ぐまでのことにて白が七と盤れば黑は何時にても八と粘ぎて善し即ち黑は白の打つに從ひて之に應じ鐵石の如く堅固とはなるなり

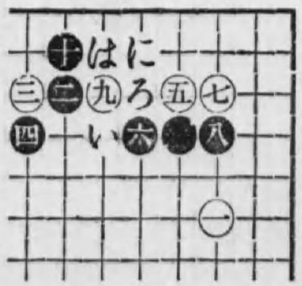
●第百四十三圖　白五と下腹よりツケ來るも七十一圖以下下腹ツケに對する說明を參照して應酬せば大過なし又白九のツケに應するは此形勢にては十に下るが殊に善し白「い」に出づれば黑「ろ」に突出し白「は」に出づれば黑「に」と突進し白に施す術なし又白十一の手を「ろ」か「は」に打たば黑は「い」に約へて宜し

●第百四十四圖　本圖は第百三十一圖の追補なり黑八の手は容易なるが如くして初學の大多數は此手を打つことなく「い」に綽ね白より十と切られて第百三十二圖の如くになり損の結果に陷るは思ふに白を外面に出動せしむるを以て惡しと速斷しさてこそ「い」に壓迫せんとは試みるなれ何んぞ知らん隅の不利なる事白を外出せしむるより遙に大なるを凡べて局部に偏するのみにて能く開展の變に通ぜざるは初學の弊患なり白十一とコスマずして「い」に押すは俗手なれば白斯く打つは誠に止むを得ず白十三重し黑より十八とカケらるゝ手順

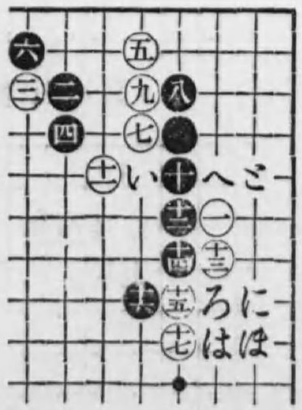
第百四十二圖



第百四十三圖



第百四十四圖



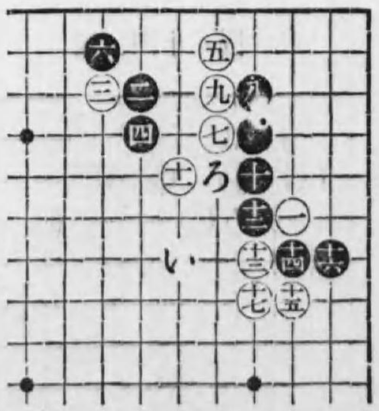
となりては困難ならずや尙黑十六の手にて「ろ」に切り白「は」黑「に」白「ほ」と打ち置く場合もあらんもこは黑「へ」或は「と」の手を利かせ隅の黑を堅むる必要の際などに用ふるを宜しとすれど損を先きにすを以て考ふべきなり圖の如くなりては白困難なりこれ十三の惡手に基づく因て此手を如何に變化すべきか次圖を見よ

●第百四十五圖　前上の理由により白十三は斯く綽ぬるかさなくば十五に飛ぶべし此圖に於ても白は「い」の邊に手を要すべし白此の備へを忽にせば黑より「い」に打ちて攻擊せらるゝことゝなる又最初黑十二の手にて「ろ」に當て打たば如何なる狀勢を現はすかを調べ見ん

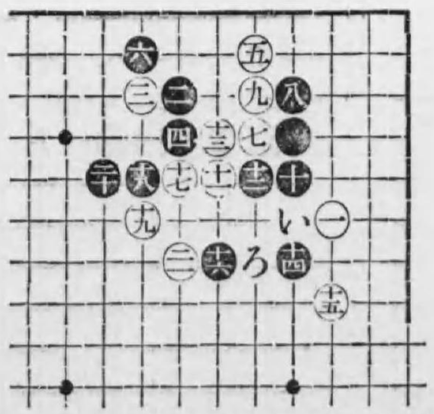
●第百四十六圖　黑十二の手は兎に角白に十三と續かれて二及四の石にダメを詰むる次第なれば注意して打つべきなり前圖に示せし如く黑「い」に押して惡しからざる時は强ゐて斯く當て打つにも及ばざるべし黑十六は十九に斜走し白を十六に飛ばしめて「ろ」に突き當るも宜し

●第百四十七圖　白五の惡手なるは第百三十六圖の條にて述べたり

第百四十五圖

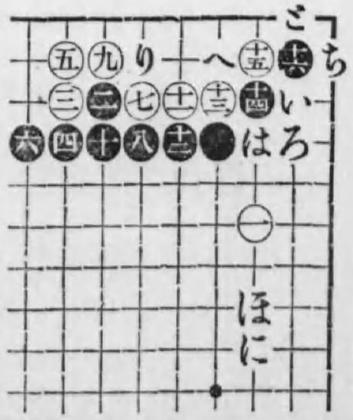


第百四十六圖



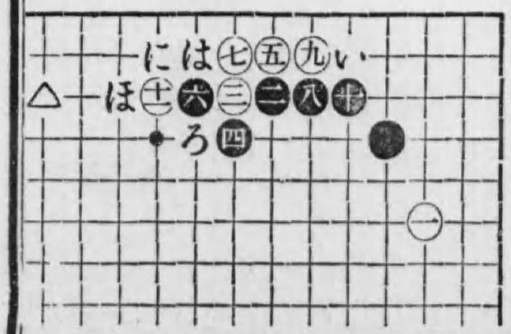
黒六と伸びるも場合によりて面白し白七とッケ以下白の思ひ通りに隅地を蠶食すと雖黒より十四、十六と猛打されては辟易せざるを得ざるべし然るに初學此の十六の二段刎を打つこと能はずして「い」に引く弊あり「ろ」「は」に續くなれば白十六に伸びし時「に」か「ほ」に夾むを得べく又白「に」の邊に拆かば次に黒より十六に抑へるを得るを以てまだしもなれど「い」に引くは最拙なり十六に二段刎するに至りては烈しくして最善し今白より「は」に切らば黒「い」に粘ぎ白「ろ」に抑へし時黒「へ」に切りて白の眼を奪ひながら隅に活く又白「い」に切らば黒「は」に粘ぐなり白「と」に刎ぬれば黒「へ」に切り白「ち」に提りし時黒「り」に三白子を切取るを以て白は「と」に打つことならず「へ」に續く位のものなり因て黒「に」の邊に一の白を夾撃すべし此手にて「ろ」に約ふれば却つて白に「に」に拆かるべし注意を要す兎に角十六の二段刎の手筋は屢々あらはるゝ姿なれば應用を忘るべからず

第百四十七圖



●第百四十八圖　本形は第百三十七圖の補説なり△印に白ありとせば此の圖の如く白九に出で手を延ばし斯く十一とックルなり黒若し十の手に

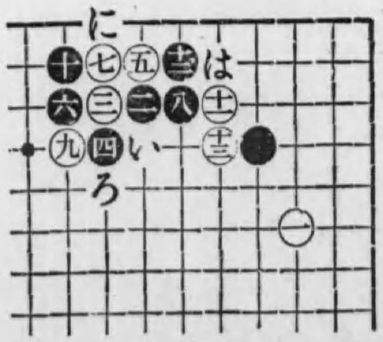
第百四十八圖



て「い」に約ゆれば白より「ろ」に切られて惡し因りて十に伸びざるを得ず故に十一にッケ黒「は」に出づれば白「ろ」に切りて黒「に」「白「ほ」となりて攻め合ひ一手勝なり是に於てか黒「ろ」に續ぎ白「は」に盤らるゝなり

●第百四十九圖　白十一とックル手筋あれども斯くの如くなりては白の惡しきは論なし其他白如何に手段すとも意の如くならず白十三の手にて「い」に切らば黒「ろ」に伸び白「は」に抑へれば黒「に」に刎ね白十三に出でし時黒十四に伸び出して矢張白不可なり

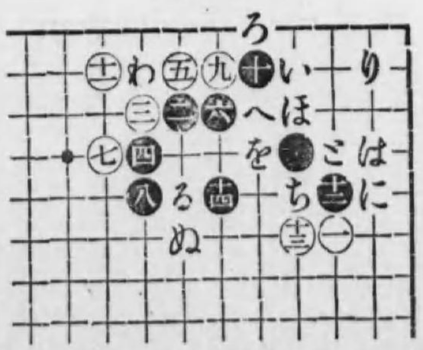
第百四十九圖



●第百五十圖　本形は第百三十八圖の補説なり黒十二とコスミッケ夫より十四と打つ手筋宜しされど白より「い」にッケ黒「ろ」に下り白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」白「と」黒「ち」白「り」と隅に活くる味ひあり注意すべしされば本形にて白「ぬ」にノゾクときは「る」と普通に續かずして「を」に打ちて守るなり斯くの如く此隅に白より活くる意味殘るとせば初め黒八の手にて「わ」に切り置き白より「い」にックる手筋を拒ぎ置くの要起る

●第百五十一圖　第百三十九圖は白十三の手にて「い」に綽ね黒を「ろ」に提らして十三にカケッギし形を示せるも此の白「い」と打ちて二目提らん

第百五十圖

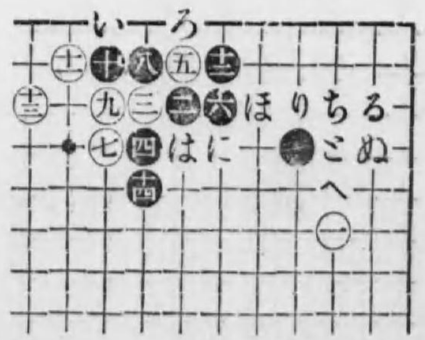


とする手はなさずして斯く單に十三とカケッグ方善きことあり其理は白「は」「に」「ほ」の諸點に自然の着手を運ぶ次第ともならば「い」と「ろ」の交換は白に利あらざる場合を生ずることあるを以てなり尙黑十四は「へ」にコスミツクル方宜しきことあり本形に於て白「と」にツケ來らば黑「ち」白「り」黑「ぬ」白「へ」黑「る」と打つべし

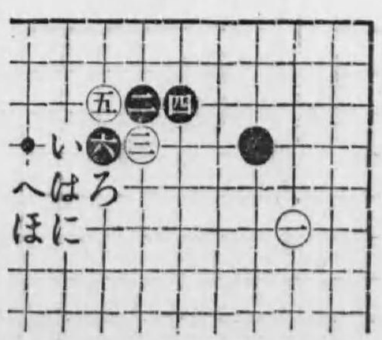
●第百五十二圖　は第百四十六圖の形と同樣なり今手順を變じて之を說明せんとす白三と上部よりツケ黑四と引きたるに白五の約へは黑に六と切られて無理なること一目して明なり即ち白五は六に伸びるか「い」に飛ぶかせざるべからず「い」に飛ぶとせば黑五に伸び白「に」か「ほ」に打つ位のものなり又黑五に伸びずして六に刎ね込まば白「ろ」黑五白「は」「に」「ほ」「へ」の諸點を撰びて適應の手を打つ位のものなり第百四十圖は白三の手にて五と側面よりツケ黑六に綽ねし時白三に切り黑四に引きしものにて同形なり宜しく參照すべし

●第百五十三圖　本形は白のコシラへ手即ち沒趣味の手に對しては黑唯普通に應じても仔細なき一例として示せしものなるが黑は始終受身にな

第百五十一圖



第百五十二圖

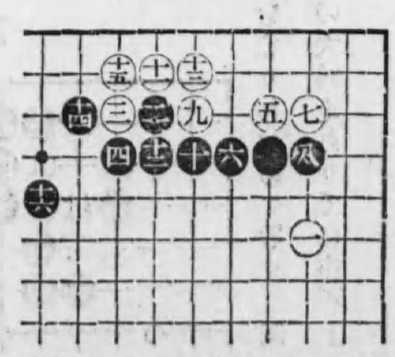


り白の意の如く應じたれども白格別の利勢なきのみか隅の黑地を吾有となせしも中原の活動に害ある鐵壁を黑に生せしめたる損害は決して相當らず以てコシラへ手の妙味なきを證す黑十六の斜走善し

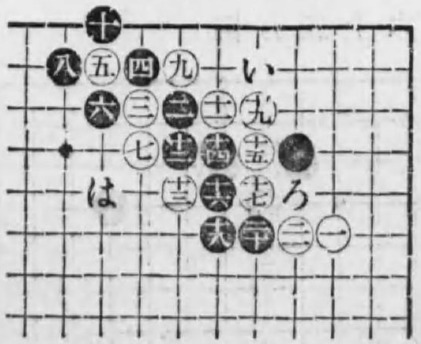
●第百五十四圖　白三のツケに對し黑は七と上部より綽ぬるの最良の應手たるは既記の說明により了解せられたるべし然らば此處に示すが如く下部より刎ぬれば如何といふに譜の如き結果となり黑面白からず尤如何なる變化にても附近の關係により損益を即定することは早計なるべけれども單に局部に付て仔細に測算せば此振替は黑の損と斷案するに憚からず黑十九の手にて「い」にカケツギ黑二一に曲り白「ろ」に屈し黑に「は」とカケられあるが書物に示す處なれども本圖の方白優れり

●第百五十五圖　此形は古人が手筋を示さんがために作りしものにて白が五とツケ又七とツケたるは如何にもコシラへ手なり而して既記の說明に從へば黑六及八は最良の應手なれども斯く左右に關係を生ずるときは却つて白の術中に陷る動機を作り遂に白より十七と綽ぬ込まれ黑の姿勢破壞するに至る黑十八の手にて「い」に打てば白に「ろ」に行びられ「ろ」に

第百五十三圖



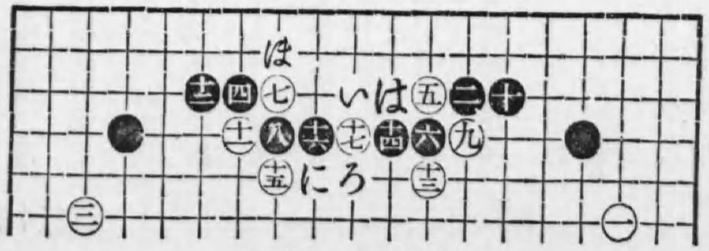
第百五十四圖



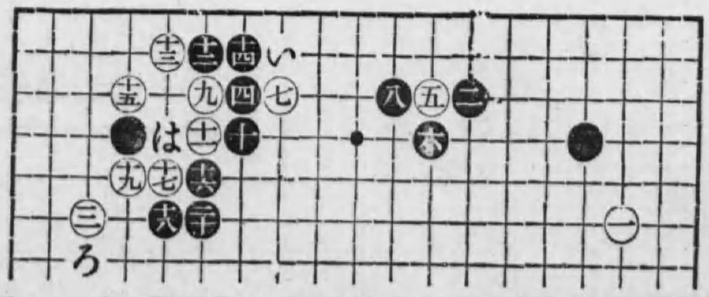
打てば「い」に行びられ何れにしても二子を獲らるべし又黒「は」に打たば「に」より押され中央を貫通せらるゝ手順となる餘は初學の試みに委すこれ御神酒の口（オミキノクチ）と稱する形にて白のハメ手にカヽリしなり故に黒は八の手にて「ほ」と下より綽ぬるか或は次圖の如く變化せざるべからず

●第百五十六圖　黒八の手にて「い」と下部より綽ねても宜しとは只今述べし處なるが斯く五の白を緊縛して打つも面白し白九及十一例の沒趣味の手なり白十一の手にて十四に盤れば黒は十一に曲り白を下邊に窮命せしむるを以て白は斯く上部に押し來りしなり結局黒置石を捨つる手段に出でたれども「ろ」にツクル手筋或は「は」に切る味等あれば機を觀て乘するを得べし。前圖は黒が左右同一の應答をとりしため失敗せし例あるに徴するも全然同樣の打ち方は避くべきものとすれば黒四の大斜走も二の大斜走ありては布石上如何十一に一間飛びて變化する方然るべし　（以下次卷）

第百五十五圖



第百五十六圖

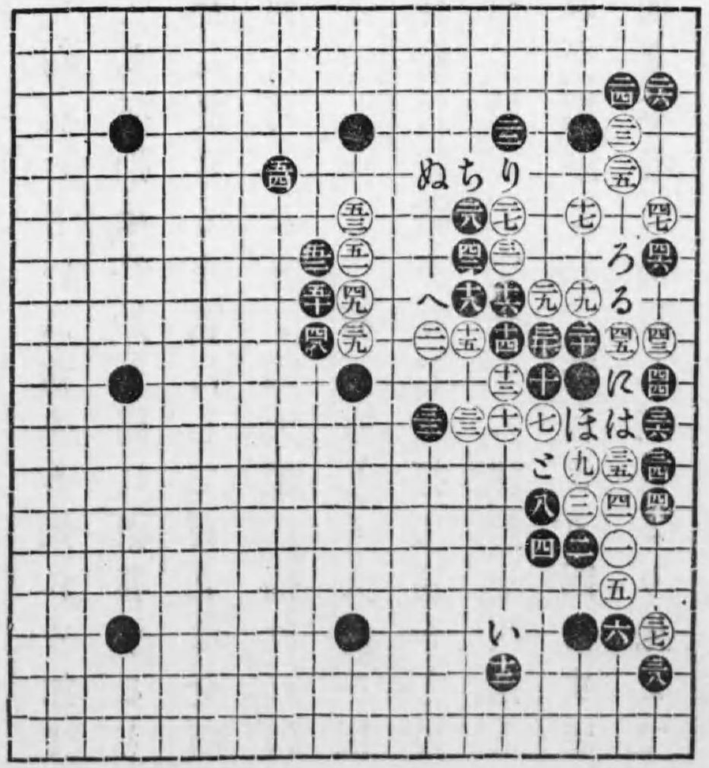


石立（局面の大体に石を配列する法をいふ）の事

石立（イシダテ）とは最初の布置の事にて布石ともいふ初學も知れる如く圍碁は打ち始め頗大切にして其巧拙は終始全局に影響するものなり抑々定石の如きは局部に於ける小戰にして石立は全局に彌たるの大戰なり小戰如何に巧みなりと雖大戰に拙ければ終局の勝利は到底覺束なかるべし而して布石宜しく大局を觀るの明あらば局部に於ける碁勢に餘裕を生じて打ち易きものなり故に定石も布石と相待つて始めて完全なる棋勢を現出し得べきものといふべし。されば今、順序として井目より四目までの布石（何れも二面づゝ）十二面を本卷に掲載し三目より先までは次卷に讓りて其打方を説示すべし

石立（井目の一）

●黒八と曲り次ぎに十と押すは後ちに三四に打ちて白の眼を奪ふ手段なり●黒十二の手は普通「い」に打つが定石なれども毎時同じ手のみにては碁力上伸せざるを以て斯く變化の型に出でしなり●黒十四、十六の手は打たずして直に「ろ」に大斜走し連絡の姿勢をとるもよしされど譜の如く打つ方碁勢急になりて白打ち惡くなり止むを得ず十七と打ちて黒の地盤を荒す而して黒十八と曲り白十九と筋に打ち黒二十に受け而して二二と守り白の出路を塞ぐにより白二三より以下三一まで此處に生を保つに汲々たるの姿とはなれり○白三一と打ちし時初學者は何の考もなく四二に續ぐ處な



れども爾か打つ時は白に先手を持たるゝ故四二の罅隙は姑らく捨て置き三二と筋に着手し而して最初十と押したりしが故に三四に打つ機會到來因て初めの考案を貫き斯く着手せし黒の趣向甚だ面白し○白三五の手にて「は」にコスミなば黒三六白「に」黒四五白四四黒四三と打ち上邊の白に響を與へ且つ「ほ」にアテコミ白を切斷する手筋となり白大に惡し因て白止むを得ず三五と受けしは白の爲め誠にツラキ次第なりなれども黒に良手を打たれ白打つ手なき故詮方なし○白三七と綽ねしは斯く打ち置けば黒の盤を妨ぐるを以て此際手順として然るべき事なり○白三九の時四二の穴に出でたき處なれども斯く打つ時は黒に「へ」に押され反つて下邊の白に影響を及ぼすを以て據なく斯くッケ黒に四十と伸びられ四二と閉塞せられては白大閉口の至りなり○白四三、四五と打ち黒を「ほ」に打たして「と」にッギ徐々に進行する心組みなりしに黒「ほ」に打たずして四六と手筋を打ちしは初學の大に味ふべき處とす此時白四七の手にて「ろ」に受くれば其時こそ黒「ほ」にッギ白に「と」にッガせ然して黒四七に伸ぶれば白の大石に眼形なし故に白四七と應じたるなりこゝに於てか白より「に」に出切りの虞れなきゆゑ黒「ほ」に打つ必要なし詳しくいへば黒の「ほ」と白の「と」と交換は黒の不利なり故に四六と打ち白の應手を試みしは黒の働きなり●黒四八より五四まで息をもつかず白を攻め立て白如何とも施す策なし白もし「ち」に綽ね出さば黒「り」に切り白「ぬ」に切れば黒「る」に切る手ありて白忽ち敗亡すべしこれ四六の巧手の爲め種々の妙味を發揮するの結果と知るべし　黒五十四手迄

石立

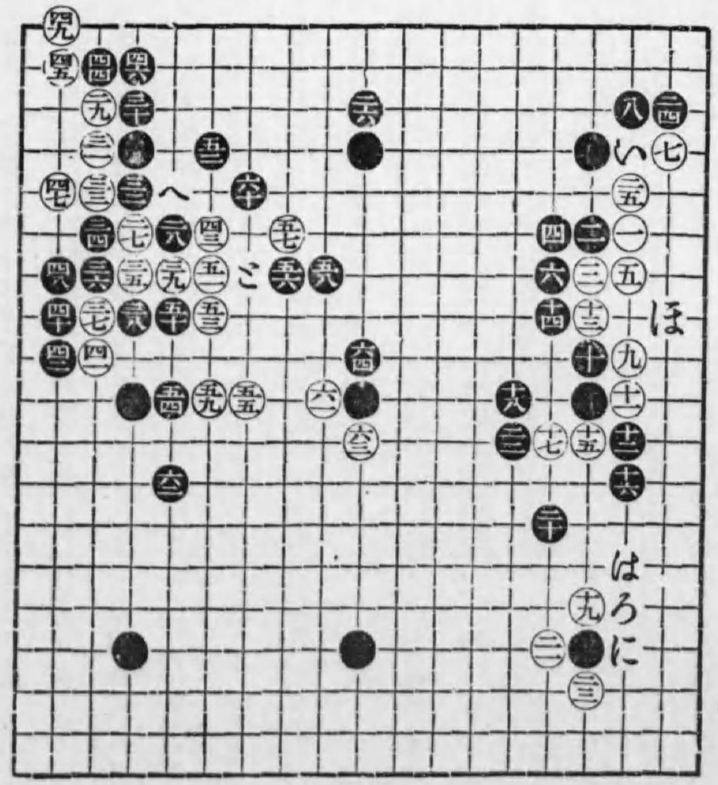
（井目の二）

○白五の手は普通の定石を變化して打ち見たるなり普通の定石とは五の手にて「い」にツクルか二五にノビルなどなり

●黒六の手は二五に綽ぬるが尋常なれども白より變化して來りし故斯く上部より約へて打ちたるにて六子以上の置碁にては面白し

●黒十の手宜し此手にて十一に抑へなば白より十四の處に綽ね出され白の趣向に陷ることゝなる

○白十九の頂（ツケ）の如きは格段なる劣手に對して白の慣用するところにして其意は黒「ろ」に刎ぬれば「は」に綽ね返し下隅の置石と十二、十六の二黒子とをカラメて利せんとの手段なれ



ば黒は勢子を顧みず二十と斜走し續ぎて二二と緊要なる十五、十七の二白子を捕獲し置くなり實に此二子は最早遁逃し能はざれども勢子は「に」に行ぶる手も殘りて未殊へず加ふるに中原の大勢悉く黒に歸し白如何ともする能はざるに至る

●黒二四と先手にて得をなし而して二六と締る運び善し若し白二五の手を脱かば黒は「ほ」に拋つべし

●黒二八の手は五二に飛ぶが普通なれども此局面にては斯く頂けて飽くまで中原を厚壯にするの計を立つこれ所謂定石を知り定石を忘れよとの金言を實行せるなり此時白三九に綽ねば黒「へ」にヒキ白三八にカケツガば黒五一白五三黒「と」と打ちて宜し又三九に綽ねずして三五にノビなば黒は「へ」に引きて不可なし是に於てか白は一轉して三九に打ち込み黒の動靜を試みしなり

●黒三四の切り强硬なり尤此手にて三五に綽ね白を三四に粘がせて夫より三五にツギて打つも差支なけれど少しく手緩き故斯く局勢を急迫して勝を定むる手段に出でしなり以下黒の手順相違なく殊に

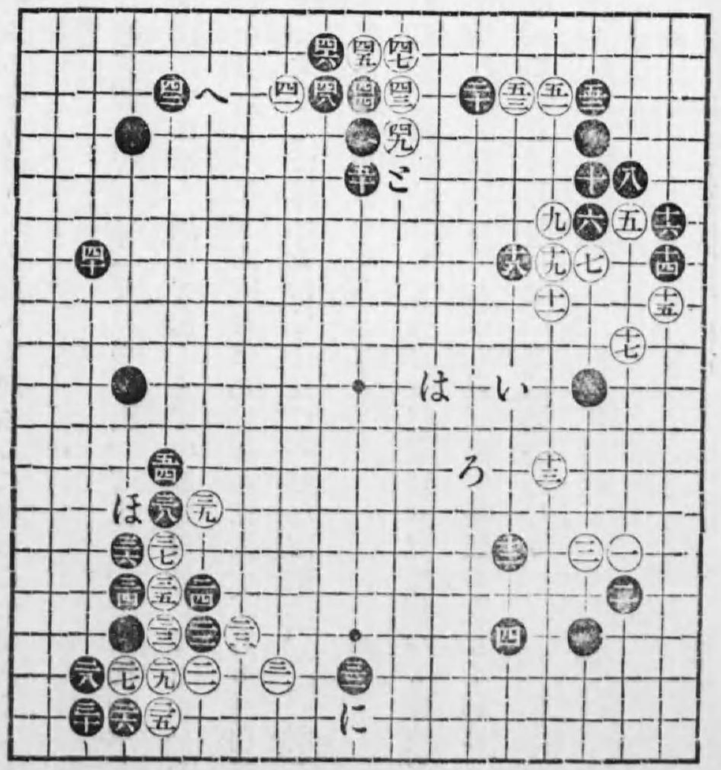
●黒五六の手筋は初學の特に記臆すべき好點なりと知るべし此石立にては黒全勝なり

黒六十四手迄

石立（八目の一）

●黒十四は手筋なれども此塲合「い」に飛び白「ろ」黒「は」と打つも好機會なりされど多數の置碁なれば斯く打つ方紛れなし●黒三二の手は普通三六に飛ぶ處なれど此の塲合斯く打たざれば白より「に」に斜走せられて下邊を白に荒さるゝを以てなり尤も白三三に突き出し來らば二二及び二四の二子を捨つる覺悟をして趣向せは過ちなし●黒四十斯く大塲を占めして趣向大に善し初學者は兎角五四の處を慮り五四に伸びる嫌あれど此手は甚だ緩弱なり白に五四と刎ねられても黒は「ほ」と粘ぐのみ何の苦痛もなき處故意に介するに足らざるなり●黒四二のコスミは普通「へ」にツメて打つ處なれどもそれにては此の隅に白より打ち込みの憂ひ殘るを以て斯く堅く打ち置くなり○白四五の手にて四九に押さば黒は四五に下るべし白隨て四七に押さば黒「と」に刎ねて白應手に窮すべし○白五一と打ち込み來りし時黒五二と抑へ二十の一子を放棄して後ち五四と行びたるは黒の打ち廻し頗働きあり前きに四十の時は他に好點ありし故手をぬき今は最早他に比較的好點もなければ始めて此處に手を下し大規模を畫するなり此處に於てか黒の優勢當るべからず

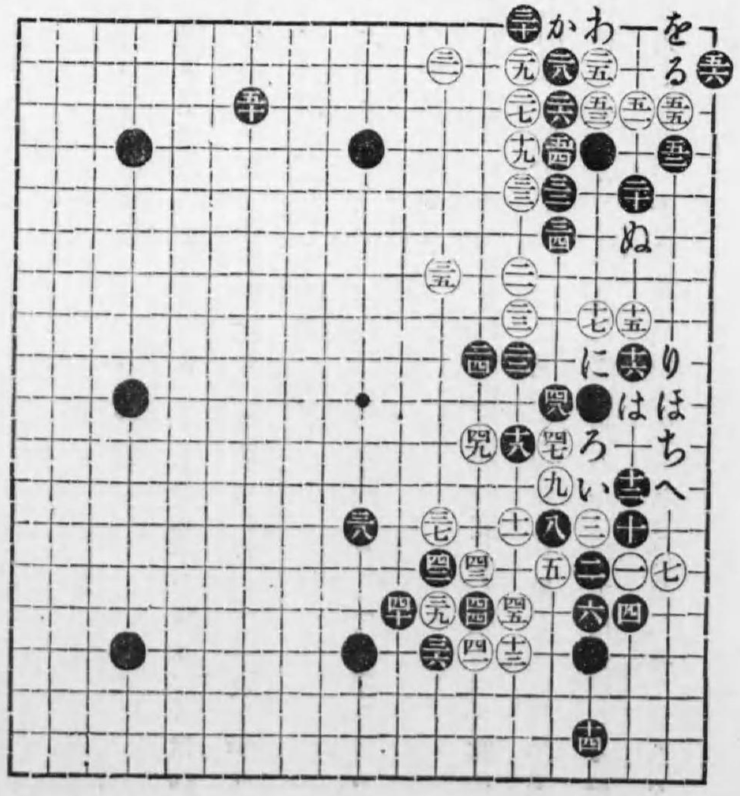
黒五十四手迄



石立（八目ノ二）

奥 粘

●黒八と上より切り次ぎに又下より十と切り上の一子を下の二子と振替りし趣向善し總べて圍碁の手筋として斯の如き一子を捨つるは惡しきものなれども此の塲合右邊の中部に置石ありて黒は地境を劃するに便なり白は一子を打ち拔くと雖も其効力比較的薄弱なるを以て六子以上の置碁には譜の如く打つ方黒無事にしてよきと知るべし尤も白九の手にて「い」に伸びなば黒九に押しつけ白「ろ」黒四七白「は」黒十六白「に」黒四八白「ほ」に下りし時黒「へ」と手筋を打つべし白「ち」か十二に應ずるならん因て黒「り」に約へ白活きたる時黒十七



と「に」の一子を征（シチャウ）にかけ黒大に佳なり白たるもの斯くの如き拙劣のの手段をとる筈もなけれど心得の爲め斯くは記すなり

●黒十四の飛び善し

●黒十六とコスミツケ十八と斜走し上邊に出動しつゝ白を攻むる打ち方甚だ善し

○白十九とカヽリたるに黒二十とコスミたるは隅を堅固にし合せて十五、十七の二子を狙ふなり白因て二一と連絡を計り且つ黒の二子を遠卷にす此の際黒此の二子を懸念せば其の機に乘じて手段を弄せんとするなり然るに黒隅の堅固なるを知り二二、二四と打ちし手段殊に善し

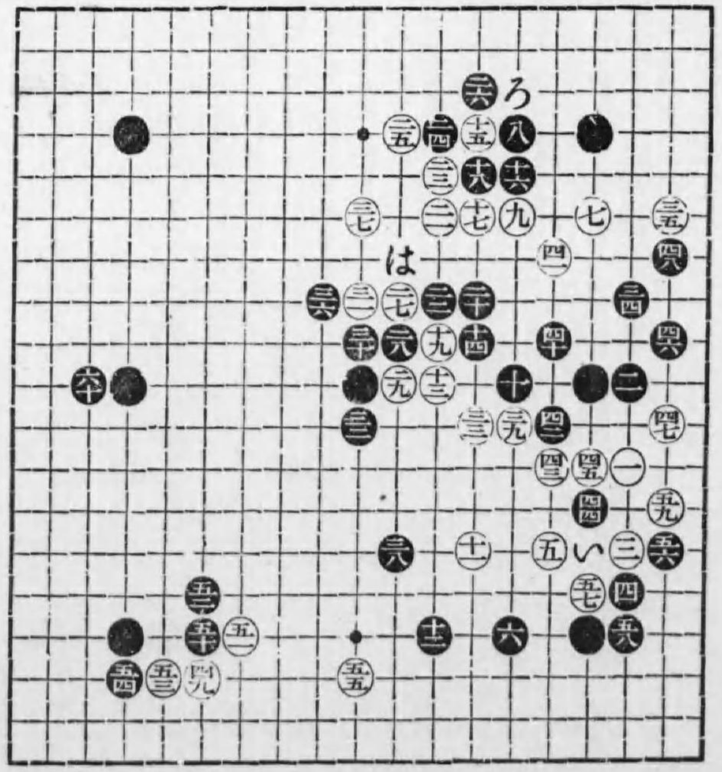
○白二五と打ち來りたる時白の趣向に乘り黒二六とコスミ三十と綽ね三二、三四と打ちて先手をとり三六と下邊の白に攻め掛り終に五十と守りしまで間然する處なし

○白五一と隅に着手せし時黒も五二とコスミ而して五六のカドオキの手は初學の宜しく味ふべき處なり兎角初學は此の型に於て「る」にツケたかるものなり然する時は白に五六と綽ねられ黒「を」白「わ」黒「か」となり白五目點（ナカデ）となり終に黒を取らるゝこと甚だ多し故に此の型に於て白を攻むる時「る」にツクルは惡手と知るべし譜の如く五六と角より打つ手なれば白の手數少なき故黒に於て取らるゝ憂ひはなきと知るべし

黒五十六手迄

石立（七目の一）

●黒二は自から定石を變化したるなり○白三と打ちたるに黒四とコスミツクルは此場合必要と知るべし何となれば白五の手「い」に伸びるは手割よりみて出來ぬ事と知るべし即ち「い」にノビては一と三との間隔餘りに狹くして惡しきが故斯く一間飛ぶを手筋とす尤白の五に對し黒直ちに五六に刎ぬるも白五九に約へ黒「い」の時白に四四と劫に受けられ却つて迷惑することあれば妄りには打まじきことなり場合見計らひ肝要とす○白九と一間に飛びたるは次ぎに十に冠する手段なり因て黒も十に飛び中央に出動して白の掩擊を避く●黒十二は十三に打ち中央の勢子と連衡するも宜し●黒十四は白より十三と隔てられたるも七と九との二子が薄弱なるを以て安んじて斯く打ちたるなり白も自家の勢力を盧り強ぬて追擊を加へず十五と着手し敵の强弱を試む其際黒畏れて十九にでも打たんか白は隙かさず「ろ」に綽れて黒をイヨメ大になすところあらんとせしも黒に十六、十八と力まれ止むなく十九、二一、二三と打ちて十五の一子を捨て中央の大石に攻め寄りたるなり然れども黒は二四、二六と打ちて先づ實利を收め而して中央の大石に活路を開く●黒二八は「は」に刎れ出しても宜しされど最初より此大石は死せずと自信し居るが故三二、三六と大摸樣に打ち三八と白を席捲するの勢ひ猛なりこれ敵を攻むるの影響に因りて大石を治むる一舉兩得の手段なり即ち白に三九と打たせ四十にて眼形全し　黒六十手迄

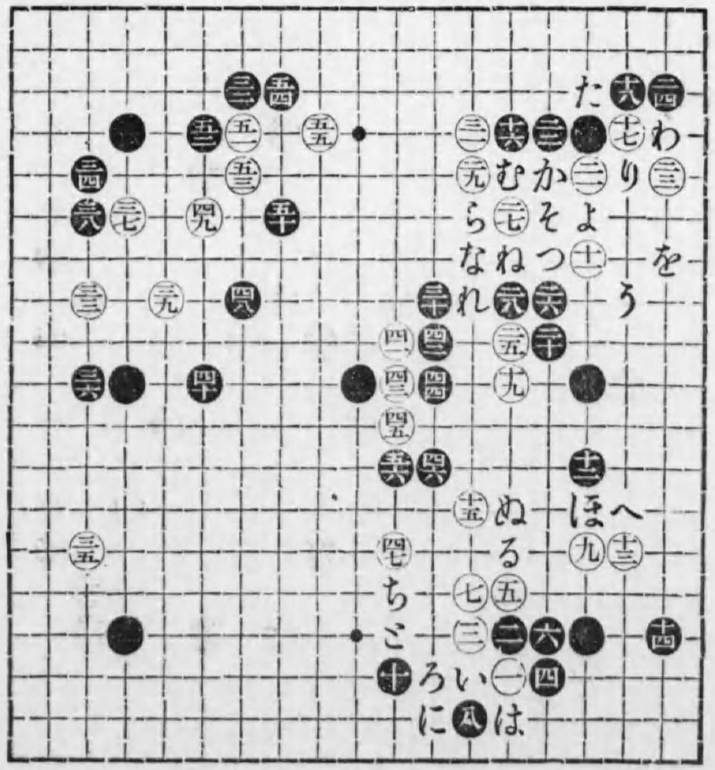


石立

（七目の二）

●黒八の手は「い」に切れば白に「ろ」に綽ねられ黒「は」白八となり白の形もなをり且つ劫附きとなるを以て紛れやすき故斯く一目を提らずして打つ方宜し此時白若し「い」にツガば黒「は」に盤り白「に」黒十白「ろ」となりし時九或は「ほ」「へ」の三點を撰み着手すべし七と覗く手は白の姿を惡しくする爲めに打ち置くものなれば黒が前の三點を撰びし時白「と」に綽ね來るも應せずして一子を放棄すべし又白が「と」に綽ねずして手を抜かば黒は機を觀て「ち」に飛ぶべし

○白九黒十は普通の手なり白が二間に掛りたる時黒十六に飛ぶか「り」にコスムが常なれど



斯く十二、十四と打つは中の黒石を白より打たせぬ用心なり

●黒十四は隅を守り白の眼形をトル趣向なり若し白十五を他に着手せば黒「ぬ」と斜走し白「る」黒十五と白を攻め立つる手段にして白も黒より斯く打たれては困難故十五と守りしなり此時は既に十二と一着補ひある故白より中の星石を攻めらるゝ憂少きを以て十六と定石に打ち得たり而も白格別の手段なきが故先づ十七とツケ十九と冠し黒の應手を試みたるなり

●黒二十は「り」に一子を抱へ白二八の時「を」に斜走し勢子と十二の二子は捨てゝも仔細なし

●黒二二は「り」に切り白「わ」黒「か」白「よ」黒「た」と打つが極りよけれど斯く打ちしは容易く白に活形を得せしめぬ强硬の打ち方なり

○白二九「れ」に綽ねなば黒「そ」白「つ」黒「ね」白「ら」黒「な」となり黒大に善し白の「れ」に對し初學は「な」に綽ね白に「ね」を切られて危殆に陷る事多し畢竟白の綽ねは無理と知るべし

○白三一と約へし時黒應せずして三二に地歩を占めしは右隅に白の手なきが故なり

●黒三六の下り善し

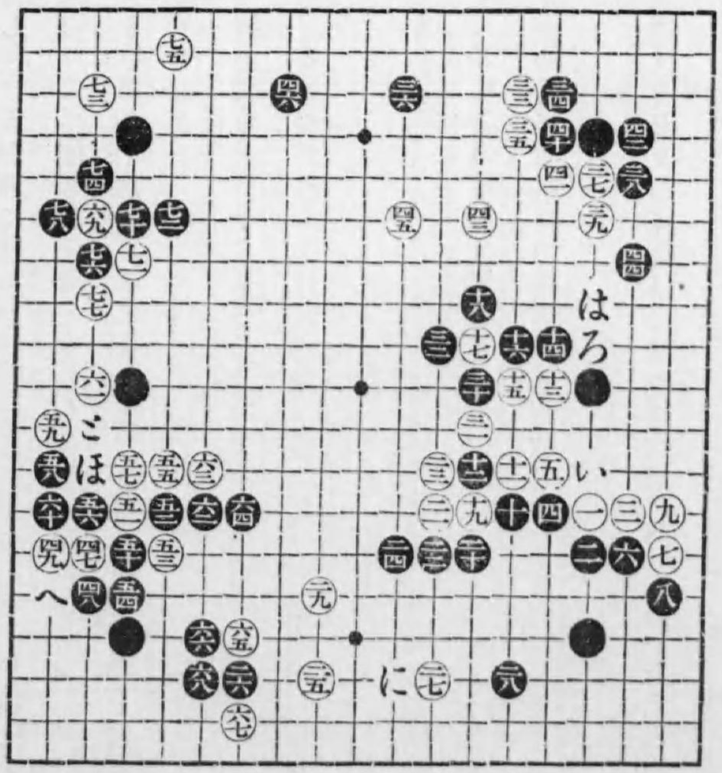
●黒四二より最後の五六迄少しも恐れず進取の態度を取りしは面白し就中四六、四八、五十、五六の手皆善し圖の如くなりては白施す術なし

黒五十六手迄

石立（六目の一）

○白十三より十七まで普通の打方なり然し白十三にて直ちに十九に切り黒も「い」に切る變化もあり●黒十八は白より「ろ」に切らるゝを恐れこゝをツギたき心地のものなりさする時は白に十九と切られて二十四迄圖の如くなり後に三十に切る手筋なくなる故に斯くはけしく綽れ白「ろ」に切らば黒「は」に刎れ星の一子を白に與へ外部を糊塗すべし○白二五と打ち來りたる時初學の心得べきは此處にあり其時「に」にツメ右隅に地境を拓き得たりと信ずるの獘あり然る後ちに白より本隅に着手せられて思はざる不覺をとり折角の領地を白の蹂躙に委するは劣手に於て數の免かれざる所とす故に圖の如く二六と反對にツメ白を二七に拆かしめて後二八と守れば假令狹くとも堅固に地面を構成し得べし這般の消息は宜しく考ふべきなり○白三三とカヽりし時黒三四とコスミつけ三六とツメし手段大に善し其理は黒三十、三二と一七の白の一子を提りありて極めて頑丈の形勢なれば白より如何に打ち來るとも黒少しも痛痒を感せざるを以てなりさなくば三六の手は三九に打つ位のものなり●黒五六の切り五二の一子を捨て置石に連絡せんとの趣向なり而して白は六二に一子を提りたき所なれども此場合黒を「ほ」に連絡せしめては局勢狹くなるを以て止むを得ず五七とツギたるなり●黒五八のコスミ味ふべき手なり兎角六十に打つ故白より五八にツケられ後手にて僅かに二目を獲るのみ斯くコスミ置けば白五九黒六十白「ほ」黒「へ」となり白手を拔けば「と」に切る手あるを以て白六一と守りたりよつて黒六二に伸び出し上下並びに利す是等を眞に一擧兩得と稱すべし

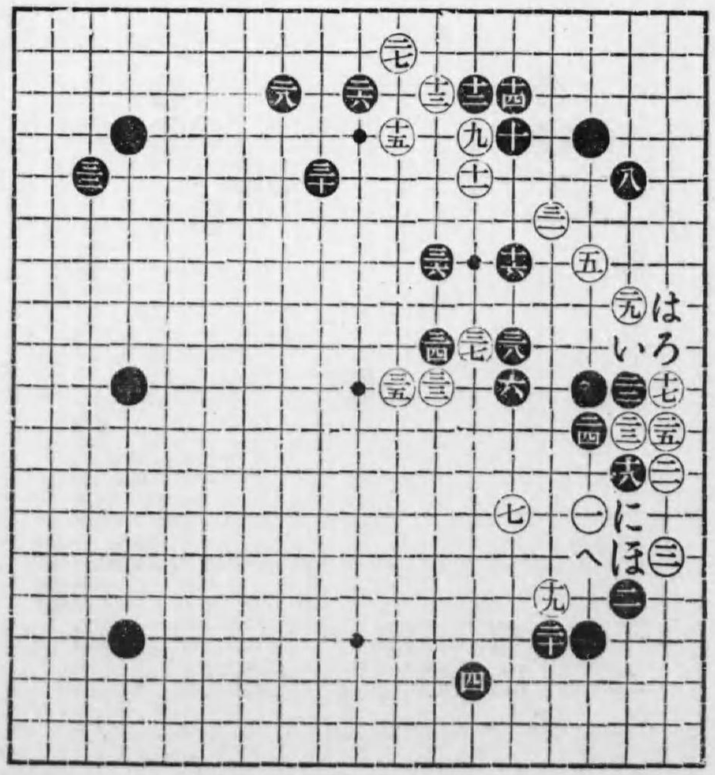
黒七十八手迄



石立（六目の二）

○白五の時黒六と飛びしは次ぎに七に冠する準備にして黒を七に打たせては大に窮するにより白も七と並飛せしなり是に於てか黒八と五の白に應ぜしは手順といふべし●黒十、十二、十四と打ちて後ち十六と五の石を隔てたるは先づ善しとして○白十七は五の一子を捨つる趣向なれば黒が五の一子に執着し十八の手にて「い」にコスメば白「ろ」黒二九白「は」となり十六の良手は格別の効果なくして終らん此の十六と打つ手は五の一子を取る爲めに打つにはあらず白を隔てゝ置くのみに打つ手なり●黒十八の手面白し白十九の手にて直ちに二一に打たば黒「に」に出で白「ほ」黒「へ」と切り白を斷つなり斯くなりては白忽ち負勢を現すを以て無據十九と甚だ打ちつらき手を下し黒の切斷に備へたるなり下隅の爲め十九と二十の交換は黒の利益なり●黒二二、二四と打ちて五の一子を顧りみず二六、二八と上邊の大石に着目し左境を開拓せし計畫大なりと云ふべし白も黒の望みを觀て二九と雁行し僅に上邊に連絡し漸く中央黒の大石に臨まんとはせり●黒三二中央の大石に懸念せず左側を守りしは外に善し是に反して黒餘りに恐慌せば白に乘せられて左側に進擊せらるべし實に三二の手は白の手段を挫くものと云ふべし即ち白に好適なる打塲なく直ちに三三に攻勢をとりしも黒に三四、三六、三八と輕く捌かれては如何ともする能はず

黒三十八手迄



石立（五目の二）

○白一は四隅の置石に掛るが普通なれども數子の置碁にては斯く變化して打つも白として止むを得ざるべし、とはいへ間合惡しき手なり故に黒は二の手にて三三に大斜走し白十七に掛りし時は右上隅に手を抜き四三に轉して打つなど布石上面白からん

●黒六は「い」に抑へ白を六に盤らし三三に伸び白「ろ」に下りし時「は」に斜走し白を右邊に偏せしむるなどの手段もあり又白「ろ」に下らずして十の處に續きても「は」に斜走する事と知るべし「は」の桂馬は實に要點なり而して白「ろ」の下りも十の續きも打たずして手を抜く時は黒十に出で七の處に切れば三の一子を得べく三四の處に切れば隅の二白子を得べし

○白十五は本手なれども「に」にカヽリ打つ方數子を讓りし對手には局面廣くならん

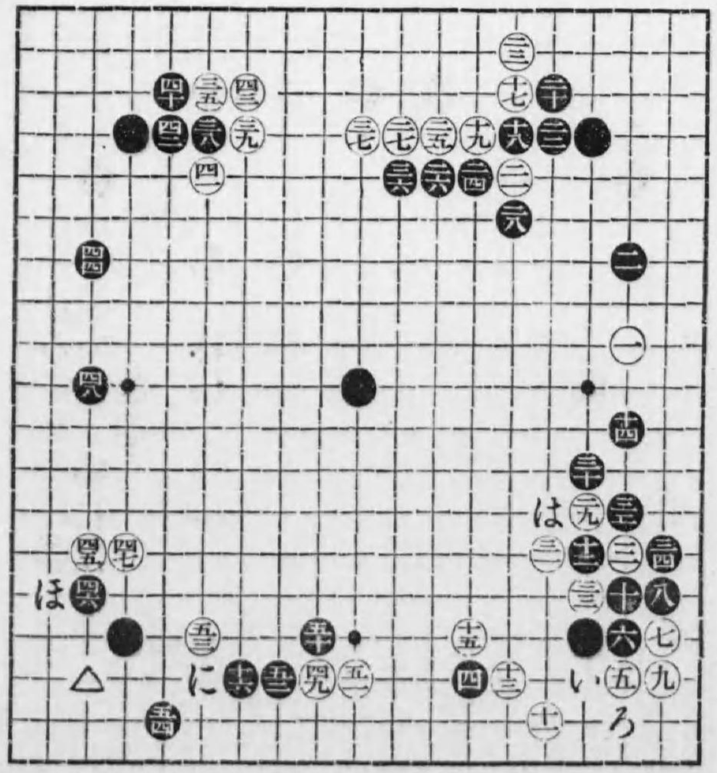
●黒二十の手は普通好まざれども二の大斜走あるを以て此の塲合には頗る當を得たり

●黒三十、三二の受け方宜し

●黒三八及び四十も時宜に適したる手といふべし

●黒五四は「に」に受くるも仔細なし白若し△印に打ち込まゞ「ほ」に下り變化すべきなり然しながら是にても黒の石立確にして必勝の勢を失はず

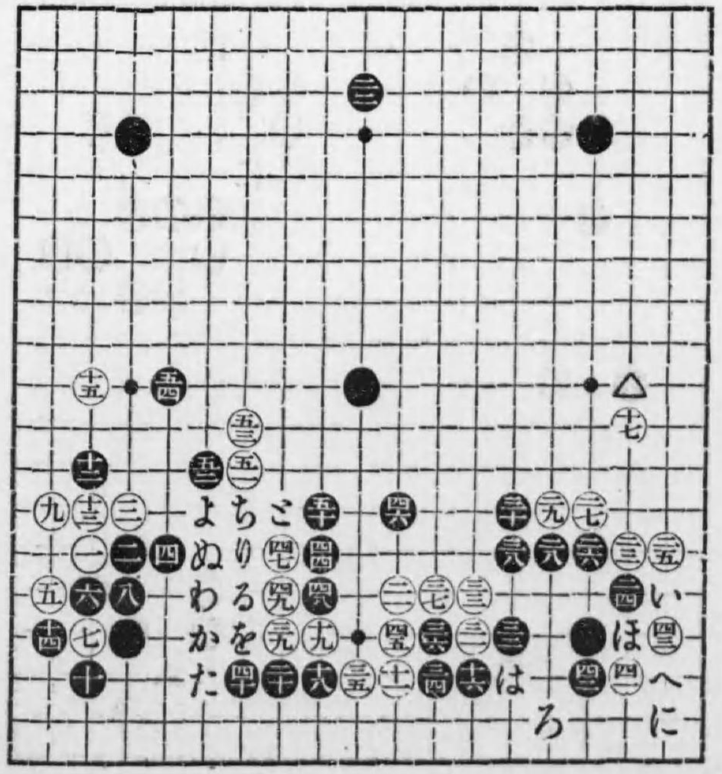
黒五十四手迄



石立（五目の二）

○白一より黒十まで項行定石なり○白十一は十四に粘くが普通なれども斯く打ちしは趣向なり●黒十二と覗きて後十四と一子を提りたるは手順なり何となれば十二と覗けば白十三とツヶ此白石重くなり白は手を抜く能はずして十五と備へざるべからざればなり●黒十六と大桂馬に詰めたるは寧ろ左側より詰めたき處なれども これ所謂敵を險（左隅の形勢を指す）に導くの碁法により斯くは右側よりせしなり白も右の次第にて二十に拆きても黒に響かず黒に△印の大塲を占められては碁勢狹くなり行くゆゑ方向を變ぜしなり●黒十八は左隅を開拓し且十一の白を攻め實に攻守を兼れたる良手といふべし○白十九とツヶ二一と飛びしは我れを守りし趣向にして十九とツヶあるがため直ちに黒を四八に並飛させぬ手段ともなりをるなり●黒二四より三十までの運び善し●黒四二の手にて「い」に打たば白に「ろ」に斜走され黒「は」に續きし時白に「に」に生きらるべし○白四三の手にて「い」に曲らば黒は「ほ」にクズムべし其時白四三に打たば黒「へ」に切る事勿論なりされば白は四三に打たずして「へ」に引くとせん其時黒四四の處より中央の大石を目掛けて攻勢を取る事譜の如くすべし●黒四四は攻撃の要點なり●黒四八は「と」に綽ぬるか五十に引き位にてもよけれど此の際斯く打ちしは白の眼形を奪ひし烈しき手段なり●黒五二、五四は手筋なり尤も此の形ちに於て黒「と」に出で白「ち」に約へし時「り」に切るも無効なり即ち白「ぬ」黒「る」白「を」黒「わ」白「か」黒「よ」白「た」となり下邊の三子を取らるゝを以てなり

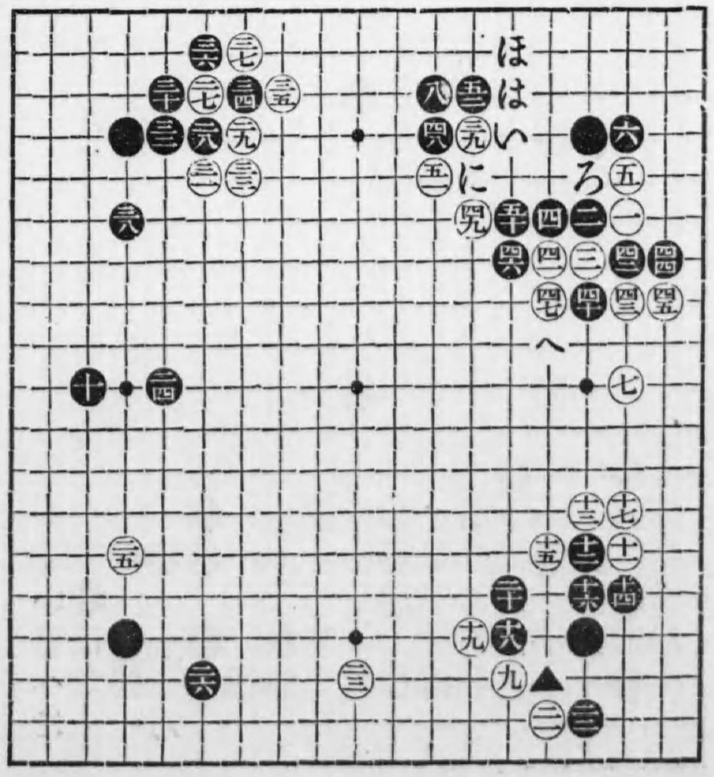
黒五十四手迄



石立（四目の一）

○白一、七まで最普通の項行定石なり●黒八の手は「い」に打つが其手にして定石なれども變化を示せしなり●黒十は白の九に應ぜず此處にては斯く地歩を占めし手段善し初學は普通十七に大斜走すれど此處に大斜走は白七のある此場合には碁法上悪手となるなり然らば此方面を打つとせば如何に着手すべきかといふに先づ▲印にコスミツヶ白十八に伸びし時十一か十四に打つ位のものなり●黒十四の約へ善し○白十九の手は場合により二一にコスミ黒の應手を試ることもあれど黒より十九の處に行びられ大抵は面白からざるがゆゑ斯く綽れ二一とコスミ二三と守りて黒の動靜を窺ふなり●黒二四大場にして善し○白二五は二六より掛りなば黒は二五に守りて善し●黒二六の手此場合にては善し○白二七の掛りに對し黒二八、三十と定石外れに出で白を攻め三八と守る打ち方堅固にして宜し○白三九と八の肩に來し時黒四十のツヶは頗る研究すべき手筋なり若し五二に打てば白に「い」に行びられ「ろ」の穴に出切りの手出來是を防げば「は」に曲り込まれ黒忽ち紛れを生ず故に斯く四十にツヶ白四三に受くれば黒四一に抑へ白四二に粘ぎし時四八に押し白「に」に行びれば「ほ」に斜走し置きて宜し白として黒に四十とツヶられたる時四三と受ける事は意地にも打てるものにあらず●黒四二と切り四四、四六、と打ち四八と押しの手段最善し黒四十、四二、四四の三手を敵に與へるが故三九の白石何んの手段をなす事叶はず譜の如くなり黒より後ち「へ」に捲る手筋ありて白誠に窮するなり此の石立は黒十分の姿勢にて勝算疑ひなし

黒五十二手迄

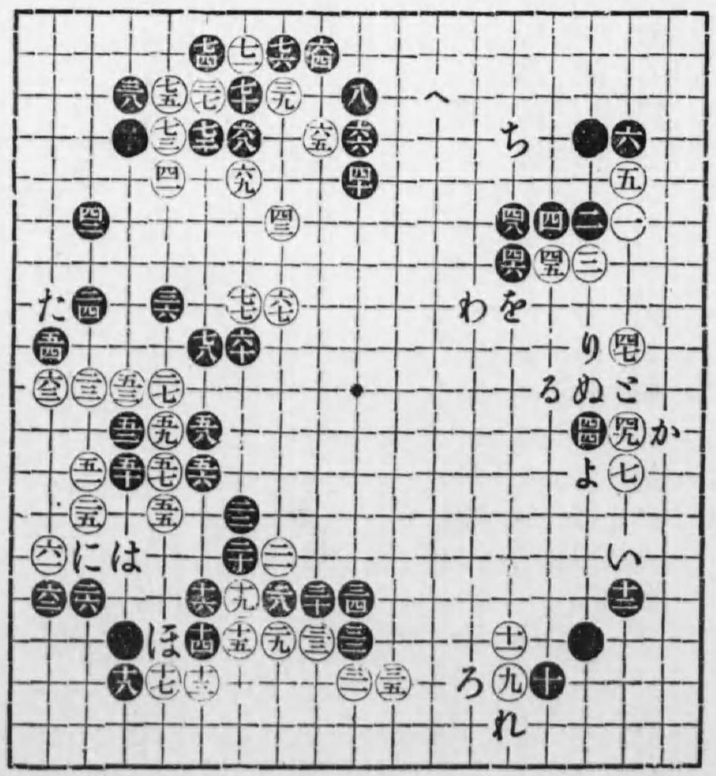


石立（四目の二）

●黒八は大場なれども四子の碁として白の七の手に對しやはり「い」か「ろ」に應ずる方慥かなり●黒二十は「は」に受け置くべし●黒二二も同樣「は」に打たざるべからず白も十九と押す手は中の星に黒石ある六目以上の置碁の場合に打つ手にて普通好まざるなり○白二五は一歩進み「に」に打ち黒二六白「は」黒「ほ」の時三三に打つべし○白三七より四三までの捌き方甚だ面白からず三七は唯三九に打込み黒三七に詰むれば又「へ」に打ち込むべし又黒三七に打たず四十に飛ばゞ白三八につくるとか今少しく工夫ありたきものなり○白四五も「と」に受くる位のものならん●黒四六悪し「ち」に控へ置くべし●黒四八も同樣「ち」に打つ方宜し四六にて「ち」に控へ白四九に打たば「り」に一間飛び白「ぬ」黒「る」白「と」と打ちたる時四六に刎ね白「を」に打たば又「わ」に刎ぬべし故に黒四六を「ち」に控へたる時白四九に打たず「と」に打ちたる時は黒四九に出で白「か」の時「よ」に屈るべし○白五一より五九まで白として如何にも忍び難き辛抱なり五一に「た」につくるか或は六二に打つとか手段ありたし又六五に覗き六七に飛びたるなど總べて平々凡々にして四目置かせたる白の白たる働き少しも見えず手を拱して唯々負を待つのみ●黒六八以下要らざる小細工なり「れ」にハネツギ位にて充分なり

黒七十八手迄

備考　此石立は特に講評的なるものにせり



「碁を打つ」といふ程度の事

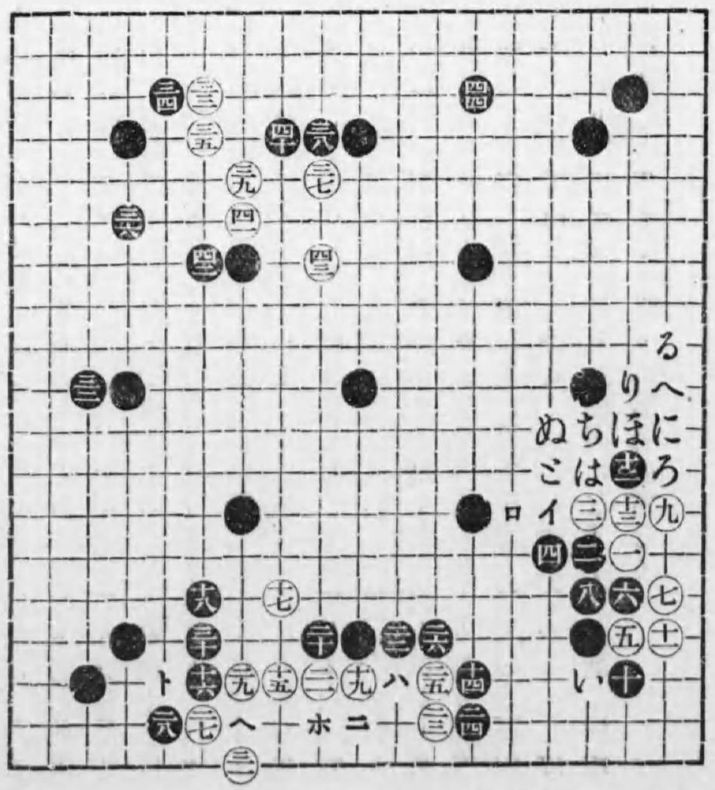
諸子は本書卷の四を修了せられたれば、これより十五目即ち十三目フダフウリン、續いて十三目の手合とならんとす此十三目の手合といふことを語を替へていへば有段者と十三目にて對局し得るといふことなり此程度に達してこそ先づ碁を打つこといひて差支なし

偖十五目となれば風鈴二つとれ前の十七目に比ぶれば局面廣くなり初學には漸々むづかしく感ずべし、これ上手は局面廣くなるに從ひ種々の工夫生じ下手は益々困惑する機會多きを以てなり然し能く々々心得打てば格別思案に苦しむことも少かるべしこれより例の如く譜を示して此範例に於ける着手の善惡を述ぶべし

本譜より甲乙丙丁の四隅に劃することなく全局面に就きて講述することゝせり

十五目の置碁（一）

○白一と掛るは普通の打方なり此時黑は二と頂くる手が置碁として一番堅固ゆゑ斯く應ずるが宜し此の頂手に對しては白も種々に打つ手あり（卷四置碁定石等に說述す）　○白五と頂けたる時黑十までの受け手は普通の定石なり此定石を覺え終らば六の手を十に約へ白六黑「い」と打ちても善き事と知るべし其時白若し手を他に轉じなば黑は直ちに十三に切りを忘るべからず十三に切り白十二黑九と下り白「ろ」と約へ來らば黑「は」に切り三の白を征にカケルなり故に白は「ろ」に約へることならず因て「は」にツガば黑「ろ」に曲り白「に」に打たば黑「ほ」に切り白「へ」に引きし時黑「と」白「ち」黑「り」白「ぬ」黑「る」にて白益々不利の地に陷るなり（尤黑十三に切る手は「トの十三」の置石なき時は「は」へ切りても白より「イ」へ出でられ三の白を征すること能はざるゆゑ十三へ切る手はなき事と知るべし）故に十三へ



切る手あるゆゑ白は十二へカケツグが本手筋なり其時黒は十四へ大斜走するか又は十九へ双ぶかすべし兎に角白は十二へカケツグが本手なれども數多の置かせ碁ゆゑ變じて「イ」に押し來らば黒は「ロ」と應じて良しと知るべし○白十二と粘し時黒十二の覗は「トの十三」に置石あるゆゑ打つ手なり若し此置石なき時は「イ」に曲り白「は」の時十四或は十九の邊に打つか又は「と」と約へ白を壓迫しても宜し是等の得失は技の進むにしたがひ自から了解すべし○白十五●黒十六○白十七皆普通の手なり●黒十八は十九へ双び白の眼形を奪ふも宜し斯く十八と飛ぶは左側に地形を作り且つ白を攻むる手段なり○白十九は打ちにくき手なれど黒より此處に双ばるれば自石の眼形を失ふがゆゑ不得已斯く打ちて保守するなり●黒二十は「ハ」へ約へても宜し然かせば白は善惡を問はず手筋として二十にフクレルなり此時黒は「ニ」へ綽ね白「ホ」と劫に受るなり夫にても黒の方惡しき事なし然し圖の如く打つ方穩にして白へ響きをるゆゑ更に善し○白二七と頂けたる時黒二八は「へ」に綽ね出し白二九黒二八白三十黒「ト」と打ち白石を取らんと打つ手もあり。なれ共白といふものは中々取れぬものゆゑ先づ斯く打ち白を活かし外部を堅固にする方紛れずして得策なり●黒三三の双び善き手なり斯く双ぶ手は六子の碁よりあり參考とすべし○白三三と掛けたる時黒三四と尖みつけ然して三六と守り善し是に於てか「ワの七」の黒石の効力は益々現る白若し手を抜きて他へ打たば黒四十と打ちて白を攻め恐らくは白に活路なかるべし故に白三七と遁れしなり●黒三八、四十は白の眼形をとりて之を攻め且我を堅固になす手なり斯く四四と守りては白より如何とも策の施し様なし此末黒は甚しき失着なき限りは勝算確實なり

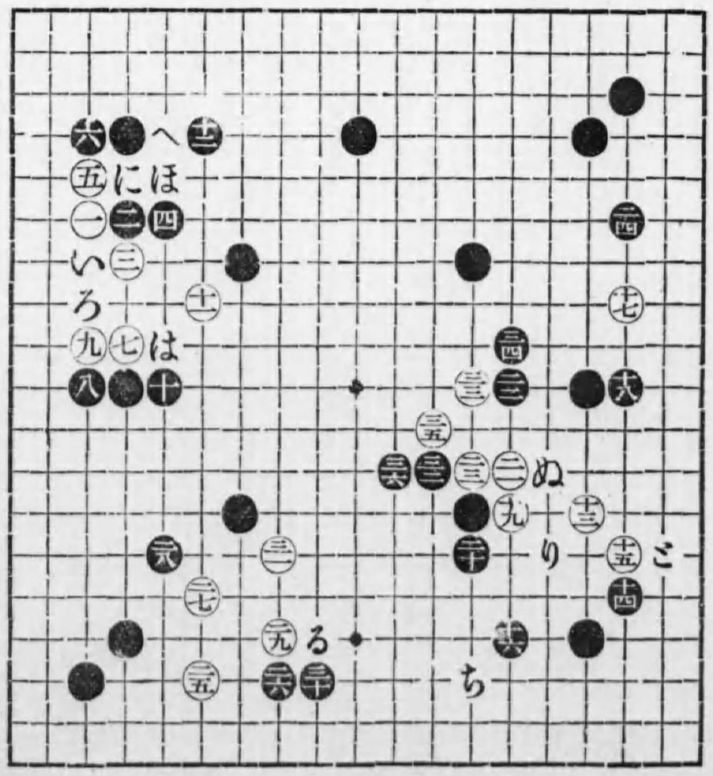
黒四十四手

十五目の置碁（二）

○白一より黒六まで最普通なる頂行定石なるは既に知悉の事ならん

○白七の手にて他に轉じなば黒は直ちに「い」に切り前譜に示したる切りと同樣の意味に打つべし故に白七は此切を防がんために打ちしものなれども「ろ」にカケツグ方本手なり然しそれにては餘りに眞面目にして黒を紛らすこと能はざるにより斯く變化して打ちしは毎々白慣用の手段なり此時黒八は九に綽ね白「ろ」に約へし時「は」と綽ても仔細なけれど圖の如きも穩なる打方なり

○白十一と斜走して上に出でしは黒手を抜けば白「に」に出で黒「は」に約へば白「へ」に切り



て戰んとの結構なり然る時は騷乱を來すが故黑は斯く十二と守るが確なり尤黑手を扱く趣向もなきにはあらず假令ば白「に」へ出でし時黑「へ」白「は」黑十二と行び二と四の石を捨てさへすれば差支なしと知るべし

○白十三より黑十六まで普通の定石なり

○白十五は「と」へ斜走することあり之に對して黑は矢張十六か又は「ち」に應じて宜し尤斯く多數の置碁ゆゑ烈しく十六の手にて「り」か「ぬ」へ掛けて打つなども面白かるべし是等は各自の工夫に因る

○白十七は常用の手なり

●黑十八は双方の白を隔つる良手なり此時白只今打ちたる十七の石の方面に着手せば黑は隙かさず「ぬ」と掛くべし攻撃を蒙りたる白は活路なからん故に白は十九、二一、二三等を下して自衛の策を講ぜしなり

●黑二十、二二と運び一轉して十七の白を夾撃し白を孤立せしめしは面白し

○白二五と普通に掛りたる時黑は風鈴の置石あるゆゑ二六と詰めて白を攻めしなり

●黑三十は「る」に突き當りても宜し

●黑三二より三六まで手順佳なり

譜の如き布石となりては黑優勢なり　黑三十六手

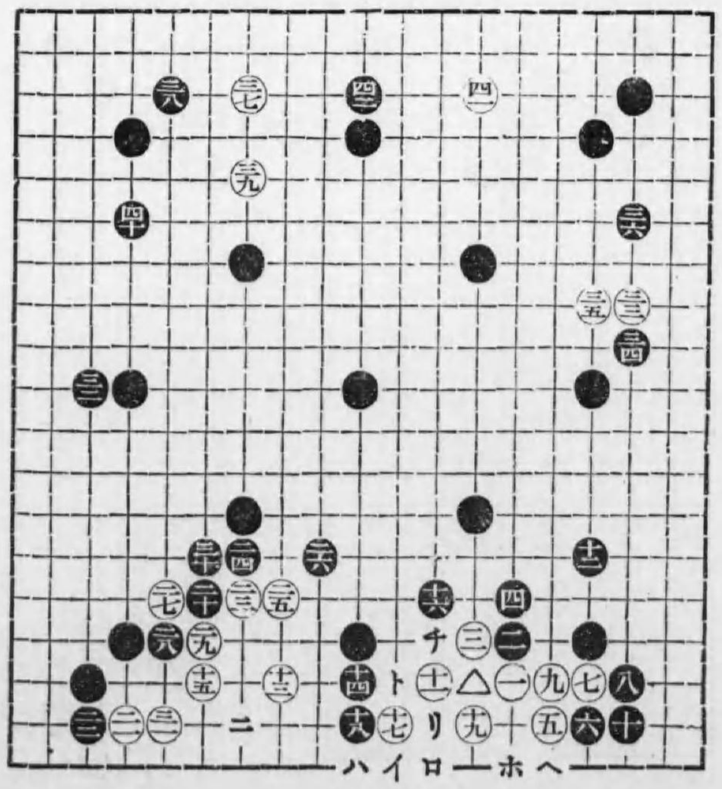
十五目の置碁（三）

○白一より黑十二まで頂行定石なり白十一のカケツギを打たず他の方面に轉ぜば前述の如く黑は△印に切る事を忘るべからず○白十三の時黑十四は前譜（一）の十八の手と同意味なり○白十五は黑より攻められても右方の石は眼形ある故薄弱なる十三の石に補ひたるなり

●黑十六は白を壓迫する手なり兎に角置碁は白を中央へ出動せしめぬが黑のため肝要なり

●黑二六の手も十六と同意味なり斯くの如く白は唯眼形を保ちて活きたるのみにては苦しき次第なり而して黑には樂しみの手筋殘れり

そは黑先づ「イ」に綽ね白「ロ」黑「ハ」と打ち次に黑「ニ」に打たば左方の白石死となるがゆゑに白は「ニ」に打ち活くる外なし其時黑「ホ」白「ヘ」黑「ト」と打ち白「チ」黑「リ」にて右方の黑は劫となる此劫は黑負けても損なく白は劫に敗すれば死となるなり是等の劫を名づけて黑



の方にありては花見劫（ハナミカウ）といふ所謂黑にありては白を取りても取らんでも宜き氣樂なることをいふなり●黑三二の守り善し白若し左方下部の地に打込み來らば黑は其石を捕ふべし其打方は別に示さゞるも宜しく工夫すべし

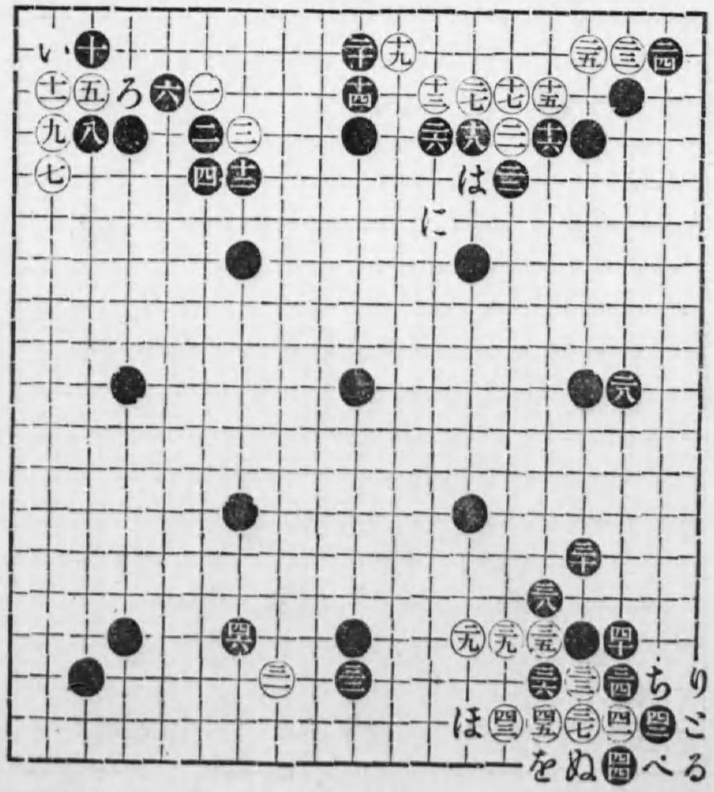
○白三三の時黑三四とコスミツケ三六と夾み一方我地を確にして攻勢をとりし手段最善し

○白三七より黑四二までは白も他に打ち樣あり黑とても同斷、夫々良手を撰びて宜しく對戰して可なり　黑四十二手

十五目の置碁（四）

○白一より黒十二まで矢張頂行定石なり○白十一は「い」に打つこともあり其時黒は「ろ」にアテ白十一に粘ぎたる時黒十二と打ちても或は十四に下りても宜し●黒十四は一方を確に地域となすなり○白十五は「は」とか又は「に」とかへ打つこともあり其場合には黒は趣向により宜しく打着すべし●黒十八善し○白十九より二五迄の着手は此處の眼形を保たんがために打ちしに外ならず●黒二八の守り當を得たり●黒三二は既に前譜にても説示しあり參照すべし○白三三と頂け以下四五まで黒白の應接は定石ともいふべき打方なり然し三四を三六に綽ね白三五へ切りたる時黒四三に尖むなり又は四五に下りても打つ手あり處により試むべし○白四三の手は惑ふところなり何となれば四五に曲りて三六の一子を取れば黒より「ほ」へ斜走さるゝ損あり又「へ」に綽ね黒を「と」に受けさせて四三と打たば幾分の働きをなす姿なれど黒「と」に受けずして四五に約へ白「ち」黒「と」白「り」黒「ぬ」白「る」黒四二の處に打込み白「と」に提りし時黒「を」とツギ全部の白死となる手筋あり故に白「へ」に締ることは出來ざるなり故に甘んじて黒より四四の綽を先手に利かさるゝなり●黒四六と轉じて三一の白を掩撃せし手筋働きあり

黒四十六手



互先定石

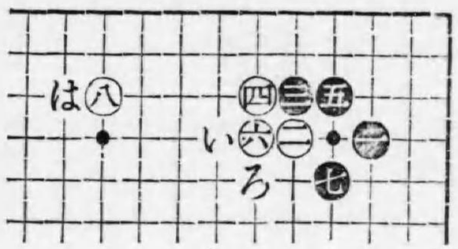
一間高掛の部

○白二の手を一間高掛といふ（卷の三、互先定石掛りの名稱を見よ）

●黒三、五は早く己れを固るの手なり

●黒三はッケ五はヒキ因つてツケヒキと稱するのである此手段は早く一どの小目にある黒を固めるので最普通の打方である○白六の手は場合によつて「い」にカケッグ事がある其時には黒が直ちに「ろ」に覗くのが手順である●黒七のコスミは定石を知らねば打てぬ善い手である只今陳べたやうに白が六の手で「い」に打つた場合にも「ろ」と覗いてから白を六にッガして次に七と尖むのが宜しい○白八の三間拆きは適當した打ち處である然し一路廣く「は」に拆きたい場合には前の六の手を「い」にカケッゲばよい。

第三十五圖



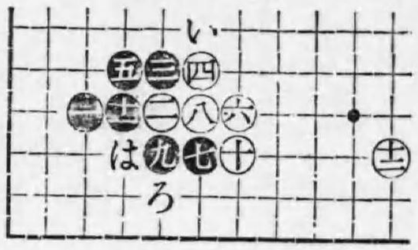
●黒三と上よりツクルは場合に因りて宜し

●黒三、五と上からツケヒク手段は場合によつては差支ない●黒七の覗は面白い此手で九にッケル定石も昔のにはあるが宜しくないので今日では餘り打たぬやうになつた○白八の手で九の處に押したなら黒は「い」か又は「ろ」に綽ねてご

らん白は打つ手にこまり結局白は直ぐに八とツギ圖のやうになるのである

●黒十一は「は」に引きたいやうな氣もするが斯く打つものと心得て置かれたい。

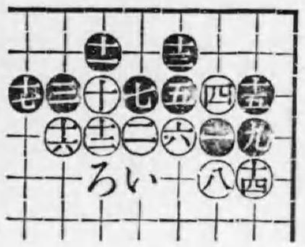
第三十六圖



●黒三は往々用ふることある手なり

●黒三は前に示したやうな七又は「い」に頂ける定石の面白くない場合に能く打つ手である○白四の手は「ろ」に尖むこともある然し好んで打つ手ではない●黒十一は十二の處に切つて打つ定石があ

第三十七圖

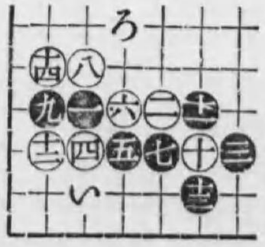


るこれは次圖で示さう

●黒十一と切り此振替り互角なり

●黒十一と切つた時白十二の手で十三の處に行びると黒に「い」と打たれて大方宜しくないそれ故に圖のやうに振替るのであるこれは互角であるによつて打碁で能く出來る形である尤黒十三の手で十四に曲ることもある其時白は「ろ」にカケッゲば善いこれで小目の部は悉大體を説いたから次に大目即ち高目に移る

第三十八圖



小目 一間高掛 の部 (終)

大目の部

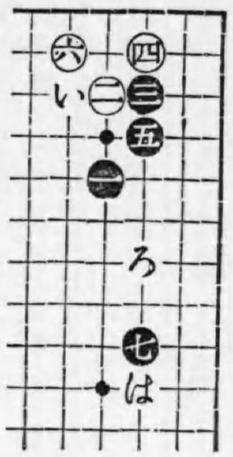
大目(オホモク)は高目(タカモク)ともいつて黒

一の手が即ちそれである卷の三五先定石の發端三點の名稱を見よ

○白二は大目に於ける普通の掛(カヽリ)なり

○白二は高目にある黒の一に打つてゆく通常の掛である初學の中には間々「い」に打つたり或は黒七の方面即ち側面から(但「ろ」より打つは定石にもありて必しも咎むる能はず)掛るなどの弊があるから宜しく此定石に從ふべきである●黒三は「い」と外側から頂る事もある(次圖に示す)○白六は記憶すべき善い手だ●黒七の處は普通適當の打場だが碁勢によつては「は」に廣く拆くこともあるそは第四十一圖に示さう

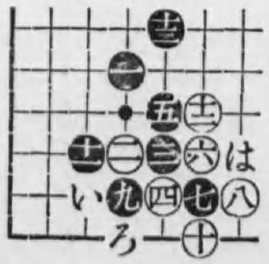
第三十九圖



●黒七、九の兩切は常用の手筋なり

●黒五と引くべきを六の處に行びて打つのが定石を眞に知らぬ人に多い此打方は古來の碁書にも出で居るが決して定石ではないのであるたゞ昔の書物は今日のやうに説明が細かくないので單に惡例として形を示しただけなのでそれを定石と心得て打つといふのは間違つたはなしである

第四十圖



●黒七と切つて又九と切るは常用の手筋だ凡べて二つの截點があると一方から切つて又他方から切つて後に切つた石を取るといふのは碁法にかなつた手段といつて善いそれゆゑ此形勢で始めに黒が九の處に切り白

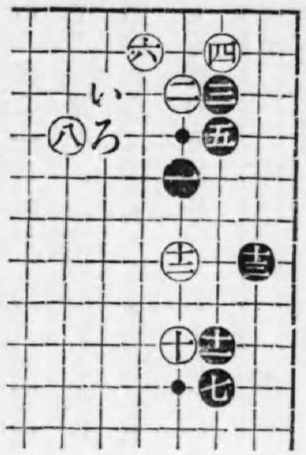
を「い」に打たして次に七に切り白が「ろ」に提つた時「は」に六の白を征にかけるといふ打方もある○白十二も黒十三も共に良手だ

○白八は記憶すべき手なり

○白八は黒が七と廣く拆いた場合に直ぐに打つて善い手である此圖は黒九の手で他の方面に打つたによつて此黒の區域が廣過ぎるから白は黒の位を消すのである○白十を俗に角(カド)(黒七の肩なり)といつて敵地を侵す場合にはよく打つ手である尙卷二圍碁に用ふる俗語の說明(角)を見られよ

黒九は手抜と假定す

第四十一圖



又黒が七と拆いたのに白が手を抜いて他に轉じた時には黒は八の處に打つて白「い」黒「ろ」と厚壯に勢を張るが善い兎に角白が八の處を捨てゝおくのは失策である以て八の點が如何に記憶すべき手筋であるかが分るであらう

●黒三は外勢を張らんとする手なり

●黒三と桂馬に掛ける手は白の二を何とか所置する樣に促しておいて外面に摸樣をとる手である○白四とツケる手は速に二の石を治めるに宜しい唯六に尖めば黒から四の處に約へられて惡るいのである○白八の手は他へ轉じても差支ない●黒九は必しも斯く星下に拆かず

第四十二圖

とも碁によつては尙ほ廣く打つこともあるから宜しく場合を考へられたい

○白八の手は濫りに打つべからず

●黒七は「い」にカケッグ事もある○白八の手は敵の外勢を堅める打方であるため現時の碁家は餘り用ひぬ樣だから濫りに打たぬ方が宜い前圖で說いた通り手を抜くかたゝ十に斜走の方が面白い然し其手段が單純で初學にも分り易いによつて此處に載せた次第である●黒十一とアテ十三とカケツイだ形は如何にも善い尤十三を場合に依ては手抜して白に「ろ」と切らせ黒は「は」と打つて九の黒を捨る手筋がある昔の打碁などには能く見受ける次に黒七の手で「い」にカケッグ打方を示さう

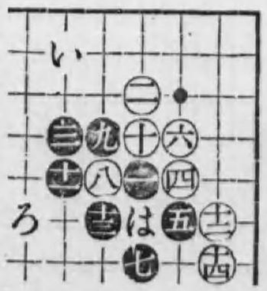
第四十三圖

●黒七は局面の摸樣によりて打つべし

●黒七とカケッグ手は附近の狀勢や局面の摸樣によつて打つのである又此手を十二の處に下ることもある其時には白は「い」に斜走し黒は「ろ」に打つのが定石で此黒「ろ」の手などは殊に趣があつて注目すべき價値が十分ある○白八のッケ出しは機會を待つてからのことで直ぐに打つのではない●黒十一の手を「は」に粘ぐのは形が惡るい圖のやうに上から曲げて白が若し「は」に一子を提つたら十三にアテ、姿勢を整へるのが本筋である此手筋は用ふる場合は間々あるから記憶せられたい

次卷に黒五の手で變化する打方を示さう

第四十四圖



三目の打碁

●黒四は敢て惡しきにはあらねど先づ「い」に カケ白「ろ」黒「は」白七の時に四に拆く方置碁として紛れなし

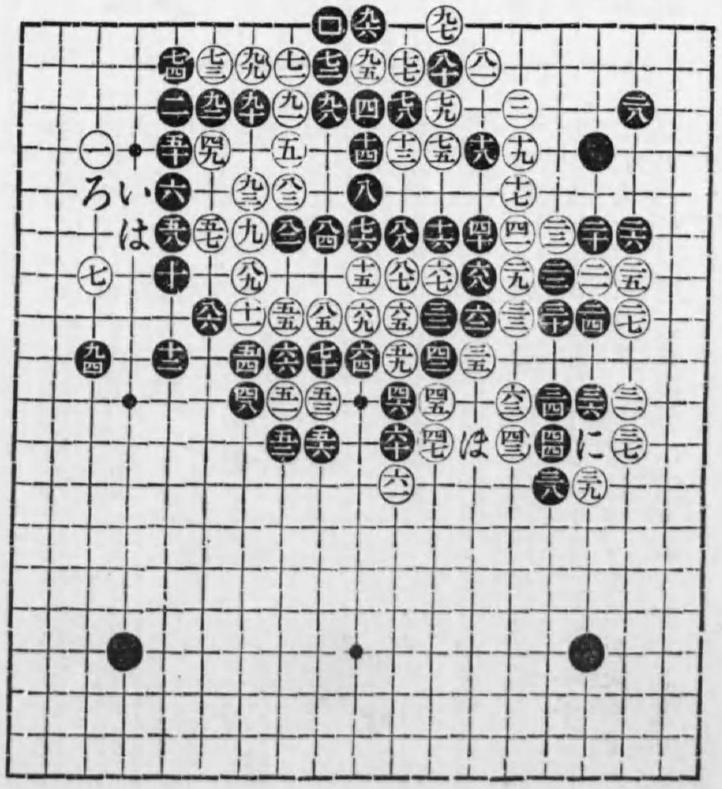
○白二一の趣向如何恐らくは無理ならんされば黒二二は穩かに二三に行び打つて差支なし

●黒二八甚だ緩し此處に至りては二九に行びて戰ふの外なし其結果は譜に比して優る事多々ならん

●黒三八は三九にカケ白若し「に」に來らば四四に約へ白三八に切らば「ほ」に飛びて打つを働きありとす

○白四三惡し「ほ」に飛ぶ方味ひあり

○白五一以下九三まで激戰なりしも其結果は



僅に持となり外部の黒を强固ならしめ且つ後手となりしは甚だ不利なり何とか他に工夫されたし

●黒九四は九五に當て打ちて後ちにすべし

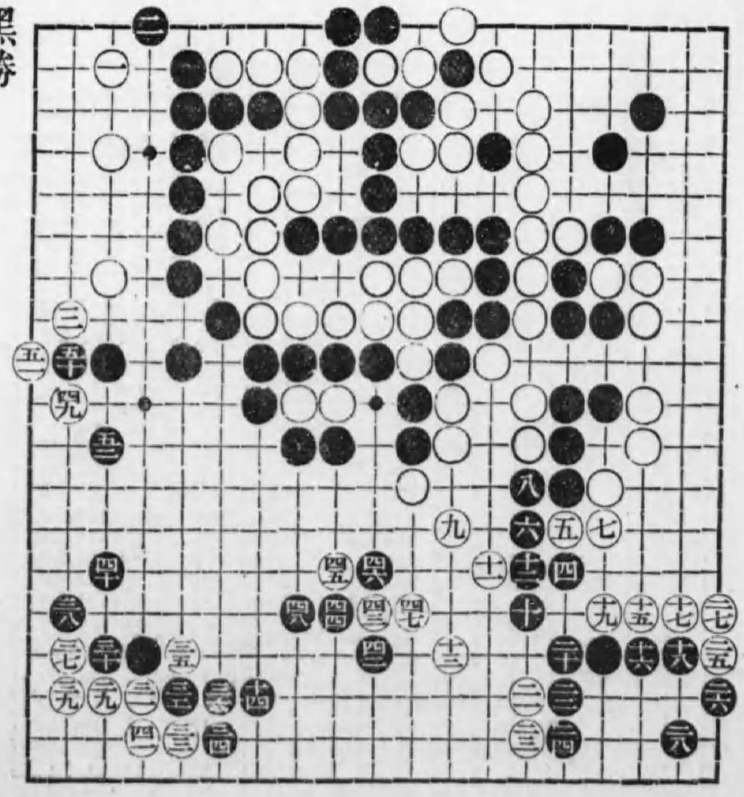
●黒十四は「い」を急務とす

○白十九打たざるを善とす

●黒二十惡し二一に打つべし白より二一に打たれて白の十九を成功せしめたり

本局黒二二より少しく紛れを生ぜし基勢となりしも四八に烈しく煽りしに白又手段宜しきを得ざりし爲め大石を辛ふじて持となせしに止まり外勢を黒に歸せしめ剩つさへ九四に先手を取られ此處に勝敗定まりしものと云ふべし　黒百五十二手迄

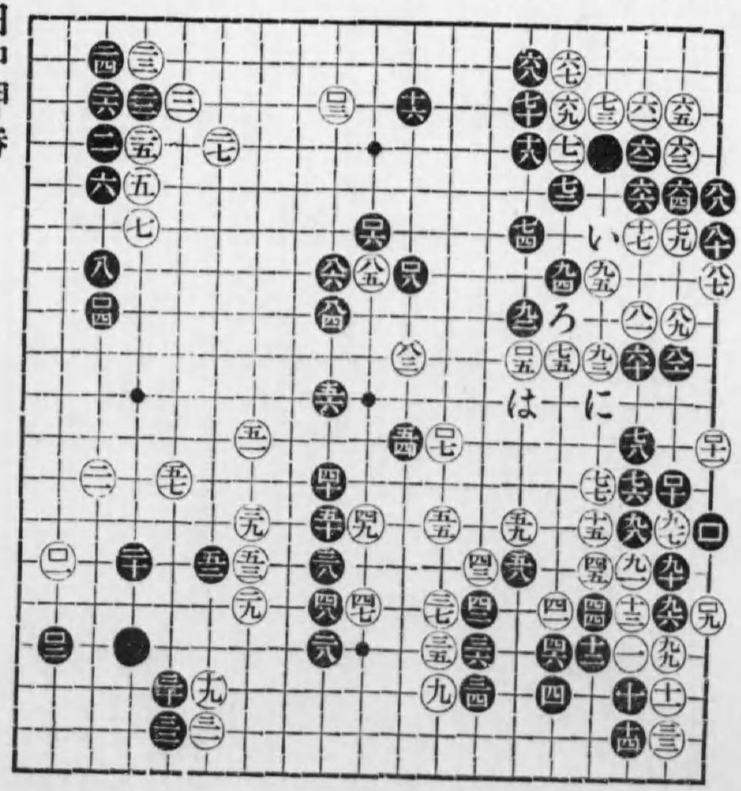
黒勝



二目の打碁

●黒二八は七八に打つべし●黒三十、三二惡し此隅所謂兩ァキにて折角一方を守るも一方より侵入せらるゝ處なれば此際一手を費すは損也況んや二八と打ち込みし事なれば三十の手にて三八に飛ぶを至當とす●黒六十は先づ六六にコスミッケ白「い」に立たば其時九三に打ち込む方宜し六六のコスミッケなき爲め白より六一と振替はられて面白からず●黒七四如何にも堅固なれども隅に損をなしたる上白より七五と打たれたる時捨て置けば十七の一子尙活動する趣ありさりとて此處を受くるも事小なるのみならず七四の黒あれば較々重複の嫌なきにあらず因て七四の手にて七五若しくは「ろ」に打ち置くなど堅固にして且つ割合宜しからん尤此場合の手筋として「は」に雄大なる摸樣を張る手段なきにあらざらんもそは餘程熟慮を要する事にて白にも手段多々あるべく且つ二子を布きたる事なれば先づは前述の如く打つを着實穩健なりとす●黒七六は七八に打つべし●黒九二惡し九七に引くべし九六に至りても同斷そは後ちに白より百十一と打たるゝ手筋殘ればなり恐らくは黒心付かざりしならん●黒百四惡し「に」にフクレ確に活きおくべし●黒百六、百八も同斷とす然るに此處に氣付ずして白より百九百十一と打たれて萬事休す黒の爲遺憾甚し　白百十一手迄

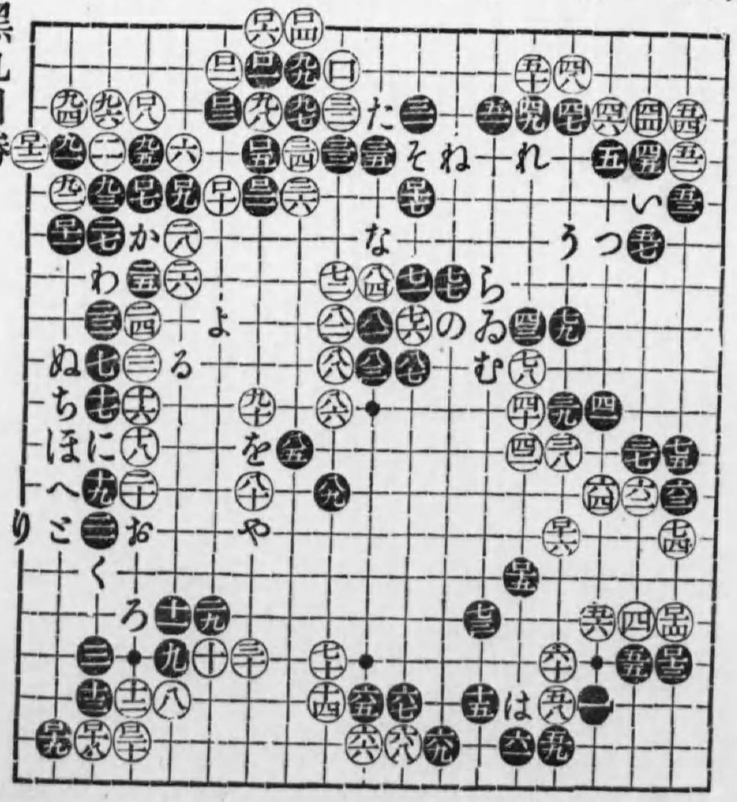
白中押勝



先の打碁

●黒五と星に打ちしは面白からず「い」に目外(モクハヅシ)しすべし●黒七の拆き惡しきにはあらざれども九に締るか又は三七に三間夾みすべし●黒九のッケ面白からず「ろ」にコスムを普通とす見よ白に十四と拆かれ次ぎに「は」にツメらるゝ患を生じ止むなく十五と位低き手を下さざるべからずして白より十六とカドに打たれ黒面白からざる布石とはなれり○白十八は二十に飛ぶ方宜し○白二十より二八迄實利に乏し二十の時「に」に出で黒「ほ」白「へ」黒「と」白二十、黒二一白「ち」黒「り」白二三、黒二二、白「ぬ」黒「る」白「を」と打つ方白として面白し黒若し「る」と伸びずして二四に曲らば白「わ」黒二五白「か」黒二八白百七黒「よ」白「を」と打ちて宜し○白二六の綽ねは「に」に出で黒「ほ」の時「ち」に切り置きて後にする方「へ」の切りを利かせあるだけ白働きなり●黒三一綏し「た」に打つべし其時白九七に打たば「れ」に守

黒九目勝



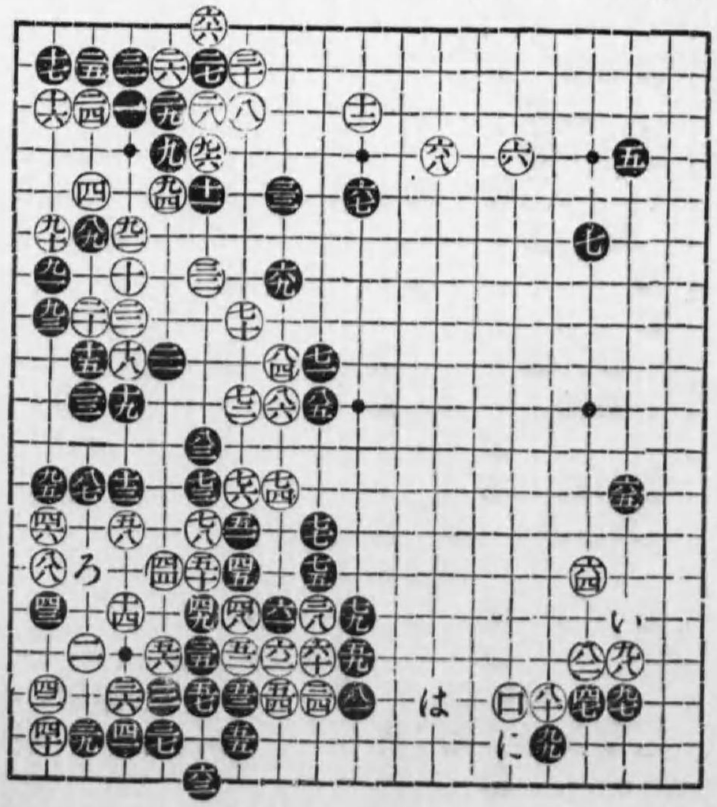
りて可なり●黒三三のツケ早し「れ」に守るべし○白三四の綽ぬ惡し九七に引くべし次ぎに白「れ」か四九に着手せば三一の一子薄弱となる故に黒は手を脱くこと能はず「れ」に守る外なし然らば白後に三五に綽ぬ出しと「そ」にツケル手筋と殘れるを以て優れりといふべし　○白三八より四二まで惡し兎に角「れ」に打ち黒「つ」白「ね」黒「な」白「ら」と打つべし●黒四三惡し七八に綽ぬ白「む」黒四三と打つを本手筋とす○白四四は「う」に打ち黒の應答に因り手段すべし三ノ三に打込みしため黒の外勢を堅くせしめたり●黒五五は穩ならず五七に打つべし○白五六緩し「い」に切り打つべし必面白き成り行きとならん○白五八、六十打たぬ方宜し○白六二、六四面白からず「な」に打つか或は七八にツキアタリ黒七九白「ゐ」黒「ら」白「の」と打つ方優れり○白七六面白からず「に」に出で黒「ほ」白「へ」黒「ち」白「お」黒「く」と手順を運びて八三に斜走すべし●黒七七緩し「の」に綽ぬべし○白八十も「に」に出で前述の手順を了して後「や」に打ち黒八一に綽ぬ出せば白八二、黒八三、白八六と打つ方優れり●黒八五穩ならず八七に曲り白八八の時百十三に下り打たば幾分の勝は黒にあり○白八六、八八面白からず八七に押し懸命に戰はゞ如何なる結果を生ずるやも計られず黒に八九と打たれ九十と退讓し九一以下着々黒より侵分の法を盡して百十三と下られて白の敗確定せり因りて評言を此に止む

要するに本局は最初黒の布石面白からざりしを白二十以下二八まで徒らに外面を糊塗せしに過きず且三四、三八等の惡手頻出して局勢否運に傾けり然るに黒四三と不味の手を下せしに乘じ白「つ」の邊に打着し挽回の策を講ずべかりしに平々凡々と常套の定石を試み敗勢愈々鮮明となれり恰も宜し黒八五と危險を冒せしこそ幸ひ白八六に猛進し奮戰一番せば局面展開せしならんに再び此好機を逸したるは白の不覺といふべし

黒百二十一手迄末略

先の打碁

○白八の趣向早し「い」又は八十の地點を擇びて空隅に據るべし上邊は黒より打ち樣なき場合なり即ち黒九にコスマば其時白十二に拆くべく又黒十二に打ち來らば白九にカケて黒の位を低くするなり○白十四のコスミは三六にコスミツケ黒を五六に立たして「ろ」に一間飛ぶべしこれ定法なり○白十六のケイマは二十にコスミツケて後打つ方宜しきことあり其故は黒より九一に走られて惡しきことあればなり●黒十七のツケ大に惡し此手は次に白より二五にコスマれて不可なるとき打つ手にて妄りに打つべきにあらず爲に白より二六に覗かれ三三までの結果は黒の不利に歸せり○白三四面白からず「い」に打つべし●黒三七の下り惡し矢張右隅に據るべし○白三八は「は」に二間ヒラクべし　●黒四三は惡手にして四五は「ろ」に打つべし白より四八と切斷せられ六三までの結果黒不可なり○白六六の提り早し八



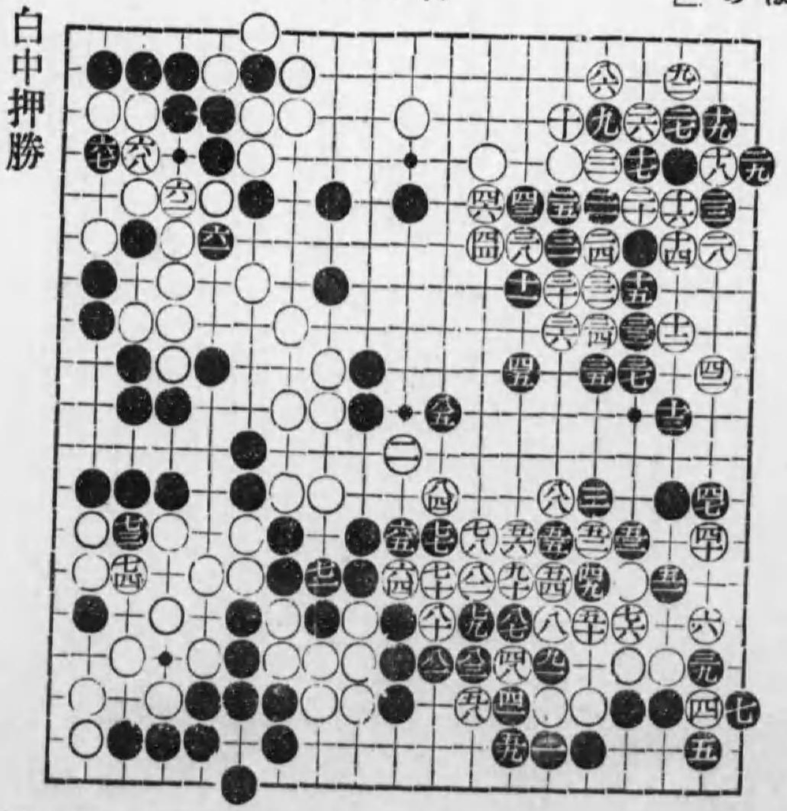
二にッケ右隅を治めて後左邊の黑に攻め蒐るべし○白七六無用の事なり七九に出で打たば十分なり七九と打たれて黑に形勢を得せしめたり○白九十は九二に抑ゆべし○白百は「に」に二段綽ねて打つべし

○白四と綽ね六とカケツギ打たぬ方宜し
●黑十一は茫漠たる手なり
●黑十五は十六にツキアタルべし圖の如く白に二二に切られては味ひ惡しく白の手段多々ありて終に敗に至りしは偶然ならずといふべし

㊀ 劫提　㊁ 劫提
㊂ 仝　㊃ 仝
㊄ 仝　㊅ 仝
㊆ 仝　㊇ 二目粘

白百九十二手迄

白中押勝



大正元年十月二十三日印刷
大正元年十月二十八日發行

定價金五拾錢

編輯者　東京市京橋區岡崎町一丁目十三番地　小林鍵太郎　電話京橋三千〇三十一番

發行人　東京市本郷區妻戀町九番地　吉川新五郎

發行所　東京市京橋區岡崎町一丁目十三番地　圍碁雜誌社內　圍碁初學會　振替口座一〇二九七番

印刷人　東京市芝區新幸町七番地　生野孝之助　電話新橋一千百五十五番

印刷所　東京市芝區新幸町三番地　生野活版所

不許複製

271
73

終